
金より大切なもの

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金より大切なもの

【Nコード】

N8102F

【作者名】

流星

【あらすじ】

信用金庫に入社し、社会人となった伊藤信治。金でなんでも手に入るこの時代で、彼はお金よりも大事なものを探している。だが世の中そうはうまくいかず、むしろ金がなければ生きていけない現実が彼の心を変えていく。『金より大切なもの』は見つかのか。そして、本当にそんなものはあるのだろうか。

第一話：始まり

世の中金で動いている。

金があれば何でもできる。

金が無ければ何もできない。

子供の頃、それはウソだと思っていた。

大人になったら、金より大事なものがあつたよ、って証明したかつた。

でも大人になるにつれ、逆にそれが確信に変わっていった。

金より大事なもの

愛？

友情？

命？

誰か教えてほしい。

金が無くても幸せになれるのか。

金が無くても毎日笑っていられるのか。

金なんか本当はいらないんだと、誰かに言っただけじゃあなかった

「おはようございます!」

今日からここ、風間信用金庫で働く事になった伊藤信治^{いとっしんじ}。

彼は一週間の研修期間を終え、この駅前支店にやってきた。

研修中を思い出すと

「ハア。」

なんだかため息が出る。

知らない顔が六人集まっの研修。

あの緊張感はなんだろう。

特に話をする間も無いまま始まり、広い会議室でバラバラに離れて座り、上司の難しい話を長々と聞いて。

でも一番緊張したのは食事の時だ!

食べる音の響くこと響くこと。

漬け物。

パリッ　パリッ　。

味噌汁。

ズ　ズ　ズ　ズ　。

特にこの二つには気を使った。

「あの空気は何だったのか。漬け物にあんな緊張したのは初めてだったなあ。」

なぜかセンチな気持ちになる信治だった。

ともあれ今日が彼の初仕事なのだ。

まず朝店が開く前に出すコーヒーの入れ方を、二年先輩の草野さんが教えてくれた。

「みんなコーヒーカップ持ってきてるから、伊藤君も今度持ってきてね。今日はお客さん用のヤツ使って。」

「はい。」

「で、これが支店長、これが次長で、このカワイイのが代理、似合わないでしょ？あと係長のと、長谷川さん、木下さん、野田さん、あと私のね。」

「はい。」

「それから次長、超甘口だから砂糖五つね。係長はブラック。木下さんと私のは砂糖二つ。あとはみんな砂糖一つでいいから。あつ、それから遅いと野田さんに怒られるから気をつけてね。」

「はい。」

（なんかもう、こんなところで早くも覚えれる気がしないよあ。まだ顔と名前も一致しないのに。）

彼の頭の中で、コーヒーカップがグルグル回っていた。

さて、八時半になると、いよいよ店が開いて本格的な仕事が始まっ

た。

信治は、とりあえず客に直接触れない真ん中の席に座らされた。ここで何をするかというと、伝票を機械で打つ作業だ。

コレは研修の時にやった。

練習用なので、「冗談で一千万円とか入金して遊んでたアレだ。

一万円入金するのを、間違つて0を一つ増やしてしまうと、客の通帳には十万円入金される事になる。

それが恐ろしくもあり、またなんだか面白くもあつた。

伝票にはお金も付いてくる。もちろん研修の時に数える練習はしたが、練習用の偽札だったし、五万、十万というリアルな金が目の前に来ると、妙にドキドキしてしまう。

仕事は、何でもとは言えないだろうが、覚えたてが一番楽しいのである。

昼、数人ずつ二階の休憩室で昼食をとる。

信治がその日一緒だったのは、木下さん。その支店の女性では一番年配の、とは言ってもまだ二十代の女性だ。

「伊藤君、だよ。名前は？四郎とか？」

「いや 信治です。」

「信治かあ、へえ、いい名前だ。うん。じゃあシンちゃんだね。シンちゃん高校は？」

「え？あ 左井高です。」

「マジで！？私も左井高だよ。全然『最高』じゃないってね。へー、じゃあ後輩だ！まだあの先生いた？ほら生物の。」

「金髪先生！」

「そうそう！真ん中ハゲてんのに金髪で、超カッコ悪いの！しかも若いフリすんだけど間違ってるの！服装とか、似合わないのにさあ。一回授業中にさあ、『身近に面白い生物はいませんか？』って訊かれたから、『はい、先生です！』って言ったらマジ切れさせてさあ！」

（　　コ、コレが噂に聞くマシンガン Took ってやつか。）

少し大人になった信治であった。

休憩も終わり、また仕事に戻ると、やはり駅前支店という事もあったか、けっこう客が来るのである。

しかし『駅前』と言っても、数時間に一回しか電車が通らない田舎の駅だ。踏切に捕まると　なんだかとても損した気持ちになる。しかも普通電車というのは、『タタタタタ、タタタタタ』　ってイメージだが、ここの踏切は『タタン』で終わる。

え？終わり？これだけ？けっこう待ってたのに？ってなる。

そんな田舎でも、客は意外と来るもんだ。

午後三時。

店が閉まる。

（あっ？なんだ。もう終わりか。五時半まで仕事だけど、何すんだ

る？)

なんて余裕ぶっていた信治だったが、実はこれからが忙しいのだ。

渉外係、つまり外回りをしている人達が帰ってきて、預かったお金や伝票を渡される。

それを急いで処理し、出納係に渡す。

出納係はその日のお金を全部預かっているような所で、そこにあるお金を全て数え、入金や払い出した金額と合うか確認する。

合えばひとまず、ホツとするのだが、一円でも合わなければ、どこで合わないのか、お金の数え間違いではないか、などと全員がかりで、嫌な空気の中での作業が始まるのである。

この日はすんなりお金も合い、それじゃあコーヒー入れてくれ！という事になった。

当然信治の役目。

(あれえ どれが誰のカップで誰が砂糖何個だっけ???)

彼にとっては、お金が合おうが合うまいが、大変な作業が残っていたようである。

午後五時半

本当は終わりの時間だが、みんな何かしら仕事をしている。特に渉外係の人や、次長は忙しそうだ。

(僕は 何すりゃいいんだ？こりゃ。)

なんて思っていると、女性陣が次々と帰りだした。

「お疲れ様でしたー！あれ？伊藤君も自分の仕事終わったら帰りな
」

声をかけてくれたのは二つ先輩の草野さんだ。

「おう。帰れ帰れ。そのうち帰りたくても帰れなくなるからな。」

係長はそう言って微笑んでくれた。

「あ、じゃあ お先します！お疲れ様でしたー！」

帰宅する信治。

その数十秒後、

「ただいまー。」

とアパートに着いた信治。

信治が借りたアパートはその信用金庫のすぐ隣にあるのだ。

「おかえり。」

の返事はない。

一人暮らしだから当たり前なのだが、寂しいものである。

「ふぁー、疲れた。」

まだ物が少なくキレイな部屋に寝転んで、信治は軽く目を閉じた。

（これからあの職場で働いていくのか 僕に務まるだろうか？とにかく頑張るしかないか。やるからには一生懸命やる！うん、そうしよう。）

いつの間にか信治は、ウトウトと夢の世界へ落ちていった

高校のスクールバスを降りた信治は、家まで数十メートルの距離を歩いていた。

ルンルンと歩く信治。彼は機嫌が良かった。
なぜなら、ようやく就職先が決まり、焦りのような感覚がやっと無くなった所だったからである。

「これでやっと、父さんも母さんも安心してくれるかな？なんだか金に苦労してるみたいだから、少しでも援助してやればいいなあ。」

独り言を言いながら、もう暗くなった道を歩く。
この坂を上れば、もう家だ。

（最近出たばつかなのに、なんだか懐かしく感じるなあ あれ？な
んで懐かしいんだろ？）

信治は砂利道の坂を、慣れた足取りで上っていく。

（そうだ、この日は。）

家はもうすぐそこまで来ていた。

（ダメだ　行っちゃダメだ　行くな　行くな行くな行くな
行くな　行くなー！！）

信治の手が玄関のドアに触れたとき、ハッ！と目が覚めた。

「ハア　ハア　。」

信治は全身に汗をビッシヨリとかいていた。

「またあの日の夢かよ　。」

少し怖い顔をして、信治はそう言ったのであった　。

1ヶ月が過ぎ、信治もなんとか金庫員としての動きができるようになった。
朝のコーヒー入れはもちろん、金の数え方、機械の打ち方、そうい

った仕事はもう素人の速さではなかった。

それでもまだまだ先輩方に比べれば遅い方。

金の数え方、速いしきれいだし　。

機械の打ち方、速いし正確だし　。

これぞプロ！って感じである。ホントに速いんだ。

信治もそれを目指して頑張っている。

しかし彼にはどうしても苦手なものがあつた。

「あ、ああありがとうございやした！」

なんじゃこりゃ、って思われそうなのあいさつ。

なんだろう　まずタイミングがわからない。

いつ言えいいのか。いや、どっちかというと誰かとカブリそうで遠慮しているせいだろうか。

あとは緊張しているから、どうしてもカミカミになるのである。

そしてそのセリフを言ってしまったって、さらに緊張する。

これぞ悪循環ってヤツである！

「伊藤君、緊張してるでしょ。リラックスリラックス！」

優しく声をかけてくれたのは、草野さんだ。

彼女は一番、新人の人の気持ちをわかってくれる。彼女自身も入ったばかりの頃苦戦したらしい。

特に野田さんに怒られまくったとか。

そんな草野の目が輝いた。

「あれー、ノンちゃんカズちゃん！久しぶり！」

「ユウちゃんだあ！元気してた？」

「高校以来だね。」

どうやら高校の時仲良かった友達のようにだ。

「何しに来たの？」

「お金を預けに来たの。」

「そんなお金あんだ？」

「失礼ね！ちゃんと貯めてるの。使わないように定期にしようと思つて。」

「えらーい！じゃコレに名前と住所書いて。あと印鑑持ってきてる？」

「あーるよ！」

高校の頃どんなに仲良くても、社会人になると会わなくなる人は多い。

遠くへ行ってしまったたり、時間が合わなかったり、連絡くがとれなかったり だからまたまた街で会ったりすると、ホント嬉しいものなのだ。彼女も例外ではなかった。いつもより高くて大きな声が出ているのが、その証拠だ。

「草野さん！コレお客さんに返しといて！私休憩だから！」

野田さんの声はいつも怖い。

（なんであんなキツイ言い方しかできないんだろう。）

信治もそう思っていた。

「佐藤様！」

草野は頼まれた通帳を客に渡した。

「ありがとうございますー！」

信治とは違い、気持ちのいいあいさつがホールに響く。

「あれ？草野さん。今の客止めて！金額間違ってる！」

出納係の木下さんの所には、処理した伝票とお金が回ってくる。
そこで彼女はミスに気づいたのである。

「すいませーん！佐藤様！」

「なんだ？」

中年男性の佐藤は、しびしび草野の所まで戻ってきた。

「通帳を確認させてもらってよろしいですか？」

「ああ！？ほらよ！」

「あー あのですね、十万円入金の手違いで一万円の入金
になってるんですよ。それで今訂正しますので少々お待ち」

「はあ！？一万しか入ってないって！？ふざけんなよ！」

「はい、直しますので少々」

「急いでんでんだよ！これで仕事に遅れたらどうしてくれるんだ！」

「申し訳ありません！急ぎますので。」

「早くしろよ！」

「はい、本当に申し訳ありません！」

草野は深々と頭を下げた。彼女の友達は、何かヒソヒソ言いながらその様子を見ていた。

3時が過ぎ、店が閉まり

草野はどことなく元気がなかった。

「ハアーーーーー。」

いや、これは完全に落ち込んでいるようだ。

彼女が悪いワケではない。入金処理をしたのは野田さんだ。

しかし休憩から戻って話を聞いた野田は、草野に一言も謝らなかった。

信治はその事に少し腹が立っていた。

五時半、信治はもう帰る時間だ。

他の人達はまだ何かしら仕事をしている。

「じゃあ、すみません、お先しまーす！」

「おつかれー。」

「おう、おつかれさん。」

ドアの前でみんなに挨拶すると、何人かが応えてくれた。

信治は何かを思い立った様子で、そして意を決して口に出した。

「あの 草野さん、今日カッコ良かったです！普通、人のミスをあんな一生懸命謝れないです！しかも友達の前でなんて、なかなかできないです。おれは、そう思います。それなのに文句も言わないで ホント、カッコ良かったです！お疲れ様でしたー！」

ボタンとドアを閉め信治がいなくなると、草野はなんだか照れ笑いをしていた。

それを見た次長、代理、係長、さらに木下の四人は顔を見合わせ、ちよつと驚いた様子で やがて笑顔になっていた。

野田は少し戸惑ったような、困ったような、怒ったような、泣きたいような ？とにかくそんな顔をしていた。

すぐ隣のアパートへ戻ってきた信治。

「ああー 何言ってたんだ？おれは あー恥ずかしい！」

彼はそう言っ　て布団に潜り込んだ。意識が遠のいていく

慣れない環境と毎日の緊張が、信治の体に疲労を積み上げていた。

最近信治は、その疲れのせいかすぐに寝るクセがついていたのだ。

そして信治はまた『あの日』の夢を見ていたのであった

バスを降りる信治。

家まで数十メートルだ。

外は暗い。砂利道の坂を上る。

そして玄関のドアに手が届いた。

（ダメだ！開けたらダメだー！！）

心の声に反して、その手はドアを開けてしまった！

明かりのついていない家の中は、不気味なほど暗い。

風が窓を揺らしてガタガタと鳴く。

玄関のすぐ目の前にある居間の障子に、何か大きな影が二つ揺れていた。

（もういいよ 見たくない 見せないでくれ ！）

障子を開く信治。そこで彼が見たものは

首を吊って死んでいる、父と母の姿であった！

それは、信治が最も忘れない記憶。

だが皮肉にも、忘れようと思えば思うほど、忘れられなくなってしまうものなのである。

信治の両親は、借金を苦に自殺していた

『あの日』信治は、動かぬ両親の前でこう言っていた。

「なんで？ どうして！？ 金が無いから！？ 借金が多いから生きていけないって！？ なんでだよ！ おれ達をおいて死ななきゃいけないのかよ！ 金なんか無かったって生きていけるだろ！ 金なんか無かったって幸せになれるだろ！？ 金なんかより大事なものを、あるだろ！
？ おれは見つけてやるからな。金より大事なものを。」

その時信治は、大きく見開いた目からは涙を流し、強く噛みしめた唇からは血を流し、拳をかたく握り、全身を震わせ、そして心に強く誓いをたてたのであった。

第一話：始まり（後書き）

のんびり書いていますが、もし「続きが早くみたい！」なんて人がいましたら書いて下さい。その時は超高速で書きますので（笑）

第二話：恋

3ヶ月が経ち、信治もすっかり信金マンの仲間入りだ。

「伊藤君、そこはそうじゃなくて そうそうそう！うまいじゃん。」

あれから草野さんは、さらに親しげに話してくれるようになった気がした。

「伊藤君！何回言ったらわかるの！？そうじゃないでしょ！？ちゃんとやってよね！」

あれから野田さんは、さらに冷たく接してくるようになった気がする。

（人はそれぞれだ。気が合う人もいれば合わない人もいるさ。）

信治はそう割り切って考えていた。

だが本当は、出会う人すべてと仲良くなりたいと思っている。

世の中そうそう、思うようにいかないものである。

そんなある日、信治は中学時代の同級生の男と再会した。

一人暮らししている事を話すと、

「じゃあ今度遊びに行ってもいい？」

って言うから、

「いいよ。」

と笑顔で返した。

が、信治はその同級生の事を好きではなかった。別に大嫌いなワケではないのだが 例えば大事にしていた物を貸して、いつまで経っても返ってこなかったり。例えば遊ぶ予定をしていたのを、直前になって断ったり。

悪いヤツだとは思わないが、好きになれない。

こういう人はけっこういるものである。

この日だって、一人で遊びに来ると思っていたのに、知らない男女5人も連れて来やがった。

「どうぞ。」

しぶしぶだが今更断るワケにもいかず。

「っていうかさー、アケミまじありえなくねー？」

「アケミは駄目だよ。空気読めよ！って言いたくなる。」

「ほんとバカだよね、アケミ。」

（アケミって 誰！？）

さっぱり話についていけない信治。しかも気付けば男女三対三に分かれている。

もちろん信治は余り。

（完全に場所が欲しいだけでここ来やがったな！）

だんだんイライラしてきた信治。そんな事はお構いなしに、周りは酔いが進んでバカみたいに盛り上がっていた。

「昨日パチンコでやたらハマったから、ガラスのドア蹴っ飛ばして割ってやったよ！」

「マジ！？カッコいい！」

（ただの八つ当たりじゃん。）

「私、九九全部覚えてるよ！」

「俺なんて分数のわり算できるもんね！」

（だからどうした！？！？）

信治の苛立ちは膨らむばかり。

そんな中信治の同級生、久保はかわいい女の子と二人きりで、こんな話をしていた。

「私の両親ね 自殺したの。」

「どうして？」

「わかんない。」

泣き崩れる女の子に久保は、

「わかる。わかるよ、その気持ち。」

そう言って抱きしめたのであった。

信治は、そつとアパートを出た。

近くの浜辺までやってくると、大きめの岩に腰をかけた。

夏の夜の波の音は、なぜこんなに心地よく胸に響くのだろう。

なんだか泣きたくなった信治は、波に向かって大声で叫んだ！

「両親が健在のテメーに、何がわかるってんだよ！！この苦しみが、この悲しみが、テメーなんかにはわかってたまるかよ！！何でもわかったフリしてんじゃねーよ！！」

ハアハアと息を切らし、海が運ぶ少しだけ冷たい風を吸い込んだ。

「すっきりした？」

突然の女性の声に、信治は驚いた。

「え！？あつ 聞いてました？」

酔いも一氣にとんで、信治は自分の顔が赤くなっていくのを感じた。

「聞こえてたよ。でもいいじゃん！私もたまに叫びたくなる時、ここに来るんだ。ホントに叫んだことはないけどね。」

彼女はそう言って笑った。

パーマをかけた長い髪は、赤茶色に染めてあり、とても似合っている。また大きな目が印象的な、とても美しい人だ。

年上の、大人の女性といった雰囲気がある。その笑顔に、信治は一瞬心を奪われていた。

「君、ここらじゃ見ない顔ね。」

「最近、近くのアパート借りて来たばかりなんです。」

「仕事で？」

「うん。風信です。」

「へえー、銀行マンなんだ！すごいじゃん！」

「いや、すごくないですよ。誰でも入れるようなところだし、給料低いし。」

「ふうーん。でも私そこ使ってたなあ。」

「今は使ってないんですか？」

「うん、もう使ってないんだ。私、七海^{ななみ}よ。君は？」

「僕は信治です。伊藤信治。」

「私昼は出れないんだけど、夜はよくここにいるから、たまに会いに来てね。」

「はい。よろこんで。」

七海はまた、優しい笑顔を見せてどこかへ帰っていった。

信治はそのまま、しばらく海を眺めていた。

「七海、さんかあ。」

はっ！と気付くと、朝になっていた。
そのまま海辺で寝てしまったらしい。

「うーん 何時だろ？」時計を見ると、針はもう十時半を回っていた。

フラフラとアパートに戻る、そこにはもう誰もいなかった。

「にしても、きたねえなあ。」

部屋は飲んで騒いで散らかったままだ。

「少しは片付けてから帰ろ！ってんだ。」

もう二度とアイツとは遊んでやらん！信治は堅く心に決めたのであった。

「い、いらい、いらっさいあせ！」

（やべ！またやっちった。）

信治のカミ癖は治らない。

「ねえ、恥ずかしいから変な挨拶やめてくんない！？」

野田が軽くにらみながらだめ押しの一言。

「。。。」

返す言葉もない。

仕事が終わりに、信治は一人アパートでムシャクシャしていた。

「わかってるさ！僕だってうまく言おうと思ってるよ！それができないから悩んでんのに！」

（はぁーあ　　海でも見に行くかな。）

ザーン　　ザザーン

海は人の心情に似ている。

波一つ無く穏やかな時があれば、激しく荒れ狂う時もある。
普段、信治の心は風の時が多いのだが、今日は時化ていた。

「なに寂しそうな顔してんのよ。」

「七海さん！」

信治の暗かった顔に、急に光が差した。

「なんかあつたの？」

七海はそう言つて、信治のすぐ隣に腰掛けた。

信治は、なんだかドキドキしてしまっていた。

「うん　職場で、僕を嫌っているような人がいるんだけど、ちょっと怒られてさ。はぁ　どうも合わないんだよねあ、怒らせるつもりはないんだけどなあ。」

「どんな仕事にしても、合わない人っているんだよねえ。むしろいない職場の方が珍しいと思うよ。」

「そんなもんですかね。」

「そんなもんよ。ちなみに、何して怒られたの？」

「ちょっと恥ずかしいんですけど、どうしても客にする挨拶がうまくできなくて。咬んじったり、詰まっちゃったりで、止めて！って怒られた。止めようとして止めれるなら止めてるつつの！
ってね。」

「それで、行き場のないようなイライラに襲われてるってわけね。」

「そうなんですよ。どうしたら直りますかね。」

「うーん 普段はこうやって普通に話してるんだから、やっぱり緊張してるんじゃないかしら。変に良いところ見せようとすると、体が強張って逆に失敗する事ってよくあるのよね。そんなときは、深呼吸をする。」

「深呼吸ですか。」

「息を思い切り吸って！」

「スウー」

「吐く！」

「フウー。」

「落ち着くでしょ。」

「でも職場で出来るかなあ？」

「その苦手な人がいるから、さらに緊張するんですよ。」

「はい。」

「そういう人は、自分にプラスの人間だと思い込んじゃうのよ!」

「自分にプラス?」

「そう!今日はこの人に絶対怒られないように仕事をするぞ!とか、この人が言ってくれるから自分がドンドン成長できるんだ!とか、いつか仕事でコイツを見返してやる!とかってね。嫌いだ合わない一緒に仕事したくない、って思っていると、なんかやる気も無くなっちゃうでしょ。だから無理やりでもいいから良い方向に考えちゃうの。意外とコレ、効果あるのよ。」

「なんか、詳しいですね。」

「私も昔は苦労したもん。」

「なんか 苦労してたように見えないツスね。」

「あら、それは良い意味かしら?若い時は苦労した方がいいのよ。信治君も、今の内にいっぱい苦労しときなさい。そうやって人は成長するんだから。」

少し年上のお姉さんというより、一回り年上の先生と話しているようだった。

(先生に恋する生徒って、こんな気持ちなのかな?)

学生の頃は理解できなかったその感情は、今なら少しはわかる気が

した。

（つていうか、これが恋ってやつなのかな？恋　恋かあ　いい
もんだな、恋って。）

信治は、心の闇に光が差すのを感じた。不安で真っ暗な未来に、その光が道を示してくれているようだった。

（そうだよ！そうだよ！金より大事なもの、あるじゃないか！金でこの気持ちは買えまい！金なんかより、恋心の方が大切だ！金なんかより、七海さんの方が必要なんだ！）

信治はもう、自信満々でそう確信したのであった。

次の日、信治はまた海辺へとやってきた。

「こんばんわ、信治君。」

振り返ると、また優しい顔の七海がいた。

「こんばんわ！七海さんのおかげで、今日はバッチリ挨拶できましたよ！それにすごく気楽になりました！ありがとうございます！」

「そんな大げさな。私はただ思ったことを言っただけよ。」

「いや、あなたは僕の恩人です！先生です！神様です！」

「アハハ、大げさすぎるわよ。でも、うまく行って良かったわね。」

「うん。七海さんいつもこんな時間に外にいて、心配されないんですか？親とか 彼氏とかに。」

「親はいないの。彼氏はあるけどね。」

「ふーん。」

「なんてウソ！彼氏もいません！あつ、今残念そうな顔したでしょ。」

「ううん、してないしてないよ。」

「今度は嬉しそうな顔してるし。」

「してないっいたらしてないの！」

信治の心は、七海にはお見通しのようだった。

「見て！すごい星きれいだよ！」

「ホントだ！すごいや！」

二人は寝っ転がって夜空を見上げた。
そこには満点の星空が広がっていた。

「都会の人に唯一自慢できると言えるのは、僕はこの星空だと思うんだ。」

「ねえ、死んだ人の魂ってどこに行くと思う？星になるって話

もあるけど。」

「そうかもしれない。死んだ人は星になって空から僕らを見守るんだ。僕らも空を見上げては、その人を事を思い出す。そしていつか流れ星になって、また地上に戻って人生を歩むんだ。」

「素敵ね。私もいつか 星になれるのかなあ。」

「七海さんがもし死んだら、きっと他のどんな星よりも綺麗で、明るくて、輝く星になるよ！きっと。」

「そうだといいね。」

二人はしばらくの間、無言のまま寝そべっていた。

海のおい。

波の音。

頬をなでる柔らかな風。

そして満点の星空。

これが金が無くてもできる、最高の贅沢なのかもしれない。

「いらっしやいませー！」

明るい信治の声が響く。

「伊藤ちゃん、今日もいつもの、お願いね。」

毎日来るこの客は、土木会社の事務のオバチャンだ。

毎日信治のところに入金のお金を持ってきては、毎日信治の手を握る。ギューツと握る。

「あのオバチャン若い男に目がないから、気をつけろよ！」

と代理は言うけれども、いったい何をどう気をつければいいものかうーん。

その日仕事が終わったのは、夕方6時過ぎ。だんだんと帰る時間が遅くなってきた今日この頃。

珍しく涉外係の長谷川さんが、早くに仕事が片付いたようで、

「シンちゃん！打ち行くか！」

と誘ってきた。

「内？？」

「パチンコだよ！やったことねーな。教えてやるから！」

「あ、はい。」

流れで了解してしまった信治。正直パチンコに興味はなかったのだが、初めて誘ってもらって嬉しかったのも事実だ。長谷川さんは体格のいい男の人で、信金さんというより、プロレスラーに見える。

近くにある、ホントに本当に小さくてボロいパチンコ屋に入ると、ジャラジャラと騒がしい音に一瞬怯みそうになる。

長谷川はパチンコではなくスロットの台に座った。もちろん信治はその隣。

「いいか、このリールに7を狙って打ってみな。」

「はい。」

（7、7、7、7。）

ビシッと止めたが7なんかどこにもない。

「難しいッスね。」

「慣れれば簡単だよ。いいか、目押しはリズムで押すんだ。7、7、7！」

長谷川が押すと、ちゃんと7が止まる。

「ほらな。」

信治も狙うが うまくいかない。

そんな感じで二時間後。

なんだかわからないが勝った信治。

「初めはビギナーズラックってヤツで勝つんだよ。本当に。また今度な。」

そう言って長谷川は帰っていった。

「よくわかんないけど　六千円勝った　　やったー！！」

信治にとっての六千円プラスは、とても大きなものだった。

いつものように海岸へやって来た信治。

「今日は遅かったのね。」

いつものように七海は急に現れた。

「今日初めてパチンコやってきたよ。　んで、なんと六千円も勝っちゃいました！！」

自慢げな信治に対し、

「たったの六千円？」

と冷ややかな七海。

「僕にとっちゃ大きいの！」

「ふーん　でもあんまり行かない方がいいよ。癖になると止められなくなるから。」

「はいよ。もうしばらく行く気もないし。」

その時はまだ、軽い気持ちでそう答えていた。

本当に止められなくなる自分を、想像もできていなかったのである。

なんでもないような会話を、毎日交わした。

それはいつしか信治の日課になっていた。

何をするでもなく、ただ話をするだけなのに、なぜ飽きないのだろう。楽しいのだろう。やはりそれが恋というヤツなのか。

とにかく信治は、毎日のその時間が楽しみだった。

「伊藤ちゃん。今日もお願いね。」

いつものオバチャンにいつものように手を握られ、それも仕事だと張り切る信治。

だがこの日、信治は耳を疑うようなことを聞いてしまう。

「あー、伊藤ちゃん。今日はちょっと急いでね。」

「はい。あれ、なんかあるんですか？」

「今日一周忌なのよ。近所の娘さんの。なんていったっけ　そう
そう、七海ちゃんよ！」

「七海。」

信治の鼓動が一気に高まった。

「すごい美人でね、愛想も良くて。私も昔から知ってるもんだから
まさかこんな早くに亡くなるとはねえ。」

「その人って、何歳位ですか？」

「そうねえ 伊藤ちゃんより少し上の 25、6じゃないかしら。」

まさか

信治は思った。

（まさか、そんなハズはないよな。だって昨日まで会って話してたんだもの。同じ名前の人なんてこの世にはいっぱいいるワケだし。）

それでも不安は頭を離れない。
嫌な予感が胸にうずくまっている。
確かめなければ！

いつもの時間、いつもの場所。
いつものように後ろから七海の声がした。

「こんばんわ！今日も来たね。」

信治はいつものようには振り向かず、こう言った。

「七海さん 七海さんって、なんで夜にしか出て来れないんですか？」

「それは 親が夜に仕事に行くからよ。」

「親はいないって、前に言ってますでしたか？」

「ゴメン、ウソウソ。本当は仕事で」

「ホントに本当のこと、言っして下さいよ！」

「子供がいたの。」

「子供？」

「道路の真ん中にね、子供がいたの。」

「。」

「車が来て、子供は気付いていなくて、私が助けた。」

「それで？」

「子供は助かったけど、私は跳ねられて。」

「。」

「去年のちょうどこの日。私は死んだの。」

後ろを見なくても、七海が泣いているのがわかった。
それでも信治は振り向かなかった。

「僕は、七海さんが、好きだった。付き合えなくても、一緒にいるだけで幸せだった。ほんの少し、将来一緒にいられたらとか、そんなことを考えたりもした。でも、もうそんな気持ちはない。なんで僕の前に現れた？一人であの世に行くのが寂しかったから？僕を道連れにしようとして？ふざけんよ！やつ

と気の合う人と巡り会えたと思ったのに！幽霊だったなんて！バカみてーだな、俺。」

「違うの！聞いて、私」

「初めて人を好きになった。初めて恋ってヤツを感じた気がしたけど 気のせいだった。欲の無い君に、形の無い恋心を抱いた。どちらも幻だった。だってもう 怖くて 震えるんだ。もう君を好きとか、そんなことは考えられないんだ。 消えてくれ。早く 今すぐ消えろよ！！」

言って後悔した。そんなことを言うつもりじゃなかった。 やつと後ろを向いたとき、七海はもう、いなかった

「うっ あああああ ！」

信治はその場に泣き崩れた。ただただ、泣くしかなかった。

恋は幻 そんなんじゃない。そんなじゃないと、信じたかった。

第三話：命

「なあ、幽霊って信じるか？」

「さあ いるんじゃないの？わかんねえけど。見たことないし。」

「もし、目の前に超美人の幽霊が現れたらどうする？」

「どうするって ヤっちゃう？誰にもバレないし、子供もできないからやりほうだい！ってか。」

「お前はすぐそういう方に考えるもんな。マジメにさ。」

「悪かったよ。 美人でも幽霊じゃあな。怖いから逃げちゃうかもな。」

「やっぱ そうだよな。そんなもんだよな。」

「何だよいきなり。」

「いや、気にしないでくれ。ちょっと訊いてみたかっただけだから。」

信治と友人の克也^{かつや}は、信治のアパートで遊んでいた。

「信治吸わないんだっけ？」

克也はタバコに火をつける。

「吸えるけど、吸わないの。吸えるのに吸わない。なんかカッコ良くねえ？」

「そうかあ？つてか吸えねーだろ！」

「吸えるつて！」

「じゃあ、吸つてみな。」

克也は自分のタバコを一本取り出し、信治へと渡す。

「。。」

信治はまるで吸い慣れているかのように、タバコをサツとくわえ、ライターを片手でシュツとつけ、もう片方の手で火を囲み、目を閉じ、大きく煙を吸い込んだ。

「ゲホ！ゲホッ！ ガハッ！オエッ！ ゲホゲホ！ フ
ウー ほら余裕！」

「どこがよ！！！」

久しぶりに会った友達とのクダラナイような時間。でもこのクダラナイ時間は、なんでこんなにも楽しいのだろう。

山がハデな衣装に衣替えするこの季節。

ついに信治は、外に繰り出されることになった。つまり預金係から、

涉外係に変わったのである。

男はやはり外の係にまわされるものらしい。

そのやり方を教えてくれたのは、パチンコも教えてくれた長谷川さんだ。

そして涉外係は、信治、長谷川さん、そして木村係長の三人になる。もともとこの地区は三人で歩いていたらしい。

長谷川さんは見た目に似合わず、とても愛想が良くて客に慕われていた。

木村係長はその上を行くほど慕われている。

仕事も真面目で、金を借りたい客もガンガン見つけ出し、この駅前支店に貢献している。

背が高く、メガネがとても似合う人だ。

でも痩せてる割にかなりの大食いだったりする。しかも早い。

普通に食べているようにしか見えないのに、気づけば信治が半分食べる前に食い終わっていたりする。

いつの間に うゝん 不思議だ。

預金係は信治が抜けて三人。

話が好きで誰とでも仲が良い木下さん。

もちろん野田さんとも仲が良い。

野田さんは好き嫌いが激しいと思われる。が、上司にはとても愛想が良い。

それは関係ない感じで、なんだか木村係長と親しげだ。

そして預金係をまとめているのが立花代理。

この人も、良い人で面白い人だが、たまに困る時がある。

「伊藤！倉庫から伝票持ってきてくれ！あれあれ、あのヤツ
。」

そして何処かへ行ってしまう。

（え！！！？なにになに？？何の伝票？？？）

伊藤はチヨクチヨクそんな感じで、パニックに陥っているのである。

融資係は草野さんと永井次長の二人。

草野さんは補助的な感じで、預金の方も手伝っている。

永井次長はとにかく優しい人で、とにかく甘党だ。ホント糖尿病にならないか心配になる。

草野さんにもよく注意されている。

この二人は親子のように仲が良い。

そして全体を後ろから見守っているのが、柳田支店長。

いつもただ新聞を読んだり、どっかの社長さんと話をしたり なんだか楽しそうだ。

でもこの支店の最高責任者なんだから、きっと何かと大変なんだろうと思っていたが、

「支店長なんてヒマなもんだよ。」

っていつだか言ってた。

（ホントにヒマなんだ　。）

なんとなくガツカリ。

でもこうも言っていた。

「支店長は楽そうにしてた方がいいんだ。そしたらみんな支店長になりたい！って頑張るだろ。」

なるほど　確かに　納得した。

さて、外勤になると自分の分は、自分で合わせなきゃならない。

朝持っていったお金、客から預かったお金、本当はダメだが客が払い出したお金、そういうものを合計してもちろん一円でも合わなければ、自分は当然、みんな帰れなくなる。それはマズい。

とはいえ慎重になりすぎると時間がかかり、そんなんじゃ今日行く予定の家や会社は全部は回りきれない。

雨が降っても傘なんかさしてられない。

あー忙しい！！

「忙しいんだって！」

「そうか 大変そうだな。」

電話越しに克也にグチる信治。

「でも中にいるより気楽なんじゃないか？」

「まあそうだね だいぶね。」

「じゃあいいじゃん。頑張れよ！」

「おう！そっちもな！」

携帯ってヤツは便利だと思う。いつでも聞きたい人の声が聞けるのだから。

「毎度様でーす！風信です！今月から代わりました、私伊藤と申します。」

そう言つて名刺を渡すのも、もう慣れたもんだ。

「はあ！？風信さん！？前の人はどこさか行つたんだか！？」

相手は田子さん。田に子で、『たご』と読むらしい。

だいぶ年配の、おばあちゃんだ。ここは月に一度、定期積金の入金の為に寄る。

信治はこの日初めて来たのだが　そういえば係長が、

「田子のおばあちゃんには、気をつけるよ！」って言っていた。

（こんなおばあちゃん相手に、何を気をつけるって言ったんだろう
??）

とにかく仕事をせねば。

「ではあのお　毎月の入金のヤツを」

「まあまあ、お茶煎れるから、飲んでけ。あれ若えもんだして、コーヒーの方がええがな？」

「いや、お茶でいいです。」

「はいよ。」

と言っておばあちゃんは奥へと消えた。
そして持ってきたのは、コーヒーであった。

「　ありがとうございます。」

「おめえみてえな若えもん見れば思いだすのお　ワイ達が若い頃はな、食うもんも、着るもんも無くてな、こんなコーヒーなんて無かったんだよ。」

「はい。」

「あの頃は、真っ白いご飯があるだけで贅沢でなあ、米粒一つ残すだけでも、そらあ怒られたんだ。今の若えもんはすぐ残して捨てる

べ。ワイ達はそういう時代を生きてきたから、絶っ対残さねえんだ。

「はい。」

「今の若えもんは恵まれてる。ワイ達が若い頃はな、食うもんも、着るもんも無くてな、こんなコーヒーなんて無がったんだよ。」

「はい。」

（あれ？なんか話が堂々巡りしてる？）

「あのお、忘れない内に入金しときましようか。」

「んだのお 昔はこうやって預ける金も無くてなあ、米粒一つ残すだけでも、そらあ怒られたんだ。今の若えもんはすぐ残して捨てるべ。ワイ達はそういう時代を生きてきたから、絶っ対残さねえんだ。」

（いやいや、待て待て！）

「そうですか、じゃあ入金のお金と証書をお願いします。」

するとおばあちゃんは、ようやくそれを取りに立ち上がった。

（あぶねえあぶねえ、危うくバアチャンワールドにハマるところだった。）

やがて戻ってきたおばあちゃんが一言。

「ワイ達が若い頃はな、食うもんも、着るもんも無くてな、こんなコーヒーなんて」

(おーーーーーい!!)

二時間後。

「おっ、無事帰ってきたな。」

「係長が、気をつける！って言った意味、わかりました。」

「ははは、これからはそういう時に、うまく逃げる方法も考えていかなきゃな。」

この日信治の夢に、あのおばあちゃんが出てきたことは、言うまでもない。

信治はバスに揺られ、とある場所へ向かっていた。

その日仕事は休み。毎週土日が休みなのは、風信の唯一いいところかもしれない。

信治が向かう先は、信治のおじさんの家。そこで妹が世話になっているのだ。

両親が死んで、信治はすぐ仕事に就きアパートを借りたが、まだ学生の妹は、おじさんが面倒を見てくれている。

信治は箱菓子を手元にチャームを押す。

「はい！」

と明るい声で出迎えてくれたのは、妹の春奈はるなだった。

「おつ、久しぶりだな！元気か？」

「うん。お兄ちゃんは仕事どう？」

「うん　まあまあかな？」

「ふふふ、とりあえず中へどうぞ。」

おじさんの家は、そんなに遠くはない。

だが車を持っていない信治は、なかなか簡単に来る事ができなかった。

いや、本当は妹に会うのが怖かったのかもしれない。お互いどうしても、両親の事を思い出してしまうからだ。

信治の不安はよそに、妹は全然平気そうに見える。優しい妹は氣を使つて、そう見せているだけかもしれないが。

「おじさん、お久しぶりです。」

「おう信治、元気そうだな！」

「はい、おかげさまで。あの、いつも妹がお世話になってます。」

信治は買ってきた箱菓子を手渡した。

「そんなのいいのに、むしろ春奈が家事をしてくれて、助かっているくらいだからね。今日はどうやってここまで？」

「バスで。」

「そうか バスだと大変だろ、金もかかるし よし。信治、車を買ってやろう！」

「え！？」

「とは言っても、ローンを組んでやるだけだ。支払いは自分でやりな。それでも良ければだが」

「ありがとうございます！助かります！」

おじさんは、春奈の学費も全部払ってくれている。

信治のアパートの敷金礼金、それに必要な家具代だっておじさんが払ってくれた。

信治はもう感謝の気持ちでいっぱいだった。

（いつか僕もお金を貯めて、おじさんのように誰かを助けてやろう。）

そう思っていた。

空から降る雨が、たまに雪に変わるこの季節。
今日は風信の忘年会だ。

美味しいご飯の後は、カラオケ。みんな歌が上手い！本当に上手い！
！ 本当は、草野は、そんなに上手くなかった。

ともあれ大いに盛り上がった。

いつもは怒りっぽい野田も、いつもは無口な支店長も、今日はみんな楽しそうにだった。

「シンちゃんも歌いなよ！」

木下にのせられ、一曲。

職場では見れない、みんなの素顔がちょっと見れた気がした。

（思ったより、楽しいもんだな。こういう飲みも。）

信治も楽しんでいたようである。

ある吹雪の夜。

まだ起きていた信治の耳に、『声』が聞こえてきた。

「キャンキャン！ウー キャン！キャンキャン！」

悲痛なその『声』は、子犬のものと思われる。

（なんだ？犬どうしのケンカかな？）

そう思っていたが、『声』はやむどころか大きくなるばかり。

信治の脳裏には、昔のある日のことが蘇っていた。

家の近くのゴミ捨て小屋。幼い信治が通り過ぎた時、その『声』は聞こえた。

「ニャー ニャー。」

猫だ！でもどこから？

見渡す限り、猫の姿は無い。だが確実に『声』は近くにいるのだ。

その『声』に近付いてみる ここだ！

そこにはガムテープがグルグルにまかれた、ダンボール箱が一つ。

まさか

幼い信治は力を振り絞り、ガムテープを少しずつ、少しずつはがしていった。

ようやくフタを開けられる状態になり、信治はソツと中を覗くとそこには、ニヤンとも可愛らしい子猫が一匹！

信治はギュツと抱きしめた。

こんな可愛い猫を、誰が！？何で！？こんな所に、しかもダンボール箱に閉じ込めて こんなの、殺したようなもんじゃないか！！

幼いながらに、怒りを感じた。

「父さん！母さん！猫が！」

「どうしたの、そんな猫なんか拾ってきて！」

「捨てられてたんだ！」

「うちに猫を飼うような余裕はない！捨ててきなさい！」

「でも」

「捨ててきなさい！」

仕方なく信治は、玄関の前に猫を置いた。

「ごめんね。ちゃんと生きるんだぞ。」

「ニャン。」

ワケもわからず置き去りにされた猫。

後でこつそりメシを食わせたが、その後、その猫を見かけることは無かった。

無事に生きたのか、それとも。

確かに金で救われる命もあるだろう。

テレビでも、貧しい国の子供が、飢えて死んでいく現状を流している。

信治には、子犬を飼って食わしてやる金の余裕なんか無かった。

アパートの部屋に、動物を入れる事すら禁止されている。

だが信治は子犬の元へ向かった。
なぜなら『声』を聞いたからだ。

その『声』は確かにこう言っていた。

『助けて!』と。

「よしよし、もう大丈夫だ。寒かったろ。」

泥まみれで雪の穴から出れなくなっていた子犬。
体は冷え切っていて、ブルブルふるえている。

信治はアパートに連れ帰り、暖かいシャワーで体を洗ってやった。

落ち着いたところでメシを与え、やがて子犬は安心して眠りについたのだった。

（金が無くたって、救える命はあるんだ。父さん、母さん あた達の命は、金が無ければ救われないものだったのですか？）

いつしか信治も眠りについていた。

ドンドンドン!というドアを激しく叩く音で、信治は目を覚まし

た。

「伊藤さん！います！？」

この声は 大家さんだ！

「ワンワンワン！」

子犬は元気に鳴いている。

（ やばい！ ）

状況を理解した信治。

子犬に

「しーつ。」って言っても、

「ワンワン、キャンキャン。」とまらない。

仕方ない。腹をくくって玄関のドアを開けた。

「伊藤さん！アパートで動物を飼えないことは、お話しましたよね
！」

「あー、こいつは昨日雪に埋まって、助けてやったんですよ。ひとまず部屋に入れましたけど、飼うつもりは」

「じゃあ今すぐ追い出さない！」

「ちよつ、待って下さいよ！せめて飼い主が見つかるまで、置いていたらダメですか？」

「そついつのを一つ許すと、他の人がマネするでしょ！ダメです！」

「じゃあせめて今日一日だけでも。」

「ダメです！ペットが欲しいなら、アパートを出て行きなさい！」

「いや、別に僕はペットが欲しいワケじゃなくて、とにかくこいつを助けてやりたいだけです。」

「なら金を貯めて家でも買うのね！犬を追い出すのがイヤなら、あなたが出て行けばいいわ！」

「わかつ」

信治が言いかけたとき、子犬は急に走り出すと、そのまま開いていた玄関から出て行ってしまった。

「あつ」

まだ名前も決めていなかった子犬の名も呼べず、もう姿が見えない玄関先で、信治は立ち尽くした。

「もしあいつが死んだら、俺はあなたを一生恨みますよ！」

大家さんを睨みつけ、子犬を探しに走った。

でも子犬は見つからず、一週間待ったが、結局それから姿を見ることは無かった。

いつかよく来ていた浜辺。あの時より海が寂しそうに見えるのは、冬のせいだろうか。それとも七海がいないからだだろうか。

「ちくしょう　ちくしょう！！結局金が無ければダメなのか！？小さな命も救えないっていうのかよ！！」

防波堤の壁を殴っても、残るのは手の痛みと、虚しさだけだった。

第四話：家族

また桜の咲く季節がやってきた。

信治のいる駅前支店は人事異動が無く、みんなそのまま。
信治にとってはホツとするところである。

信治の歩く地区も変わらず、客と信治は、もう顔見知りだ。

「伊藤君、悪いんだけどこの定期解約して欲しいのよね。」

保険屋さんの石田さんが持ってきたのは、十万円の定期預金証書だった。

「ありや、なんかあつたんですか？」

「来週息子の誕生日なんだけど、新しいゲームの機械が欲しいんだつて。けっこうするのね、今のゲームつて。」

「定期崩すのはもったいないんで、よかったらカードローンでも作りませんか？」

「んー、でもそれ作ると使っちゃうのよね。それに来週までに出来る？」

「んー、ギリギリかな？じゃあしょうがないですね。」

信治は解約用の伝票と、朱肉をバックから取り出した。

「では、これに名前とハンコを、あと証書の裏にもお願いします。」

「これでよし、かな？」

「はい。あ、ハンコこれで間違いないですかね？」

「たぶんコレだと思うんだけど。」

「もし違ったら、また明日にでも伺います。来週までに持ってきてくれば大丈夫ですよね？」

「すみませんね、お願いします。」

「いえいえ。ところで、犬見てないですよね。」

「あー どんな犬だったっけ？」

「小さくて柴犬みたいな顔で、毛は茶色なんだけど、右前足だけ真っ黒の犬です。」

「んー やっぱり見てないわね。」

「そうですか、ありがとうございます。」

信治は客に、あの日助けた子犬のことを聞いて回っていた。が、有力な情報は得られなかった。

「毎度様でーす！」

ここは月に一度寄る、鈴木さんの家だ。

鈴木のおじいさんは、世界のことわざに詳しく、いつも一つ教えてくれる。

「ところで、子犬、見てないですね。」

「見てないなあ。」

「そうですか。」

肩を落とす信治。するとおじいさんはこう言った。

「『わるいことすべてが、害になるとはかぎらない』これは、イタリヤのことわざだ。」

「どういう意味なんですか？」

「良くないことでも、受け取りようによっては、善に変えることができる。そういう意味だ。もし子犬が出て行かなかったら、君がアパートを追い出されていたかもしれない。子犬はそれをわかっていて、自分から姿を消したんじゃないかな。」

「でも　また穴に落ちたりしてるんじゃない。」

「大丈夫さ。一度助けてもらった者は、その命を大事にするもんだ。きつと、どこかで元気にしとるよ。」

おじいさんの言葉に根拠はない。それでも信治は、なんだが心が落ち着いた感じがしていた。

「ごめんくださーい！」

「あら、シンちゃん。ちょうど良かったわ。今できたところなのよ。さっ、上がって。」

ここは高額預金者、佐藤さんの家。ここのおばあさんは、いつも昼飯をご馳走してくれる。

とても親しくなり、いつしか

「シンちゃん」、

「ばあちゃん」と呼び合うようになっていた。

「ばあちゃん、今日は何？」

「特性カレーよ。絶対おいしいから。」

「わお。こりゃ楽しみだ。」

信治にとって、一日で一番安らぐ時間であった。

高額預金者とは言ったが、ばあちゃんはお金持ちというワケではない。

コツコツコツ貯めて、一千万の定期を作ったのだという。

「ごちそうさま！最高に旨かったよ。」

「本当に？それは良かった。」

自分の為に、料理をして待っていてくれる人がいる。それだけで、信治は嬉しかった。

自分が作った料理を楽しみに、いつも来てくれる人がいる。それだけでおばあさんは喜んでいた。

急にメロディーが流れた。信治の携帯の着メロだ。

「すいません。」

と、携帯をとる信治。

（げっ、川岸さんだ。）

川岸は、ガソリンスタンドの事務員のおばさんで、いつも信治に電話をして呼び出す。

旦那さんは自衛隊なので金持ち。風信に定期をいくつも作っている為、逆らうに逆らえないのだった。

「伊藤さん、今すぐ来てちょうだい！」

「いや、今すぐはちょっと」

「小銭が足りないのよ。早く来てよ！」

ツーツー 切られた。

「ゴメンばあちゃん。行かないと。」

「大変だねえ。また明日寄ってよ。」

「うん。じゃあまた。」

急いで川岸があるガソリンスタンドへ向かう。

客と親しくなつて、良いこともあれば、悪いこともある。もちろんこっちは悪いほう。

「毎度様でーす！」

「あら、早かつたわね。」

（お前が早く来いつて言つたんだろーが！）

ちよつとムカツ！

「じゃあ両替してくれる？百円を二本と、十円を六本。あと一円を二本ね。」

百円を二本とは、百円玉が五十枚まとまった棒状のものを二つ。ということ、一万円分になる。

「あー、すいません。十円が今二本しかないですね。」

「二本じゃ足りないわよ。持つてきて！」

「では今二本やるので、残り四本は後でもいいですか？」

「いいわよ。」

ともあれ、一旦支店に戻つてまた出て来なければならぬ。だいぶ

時間ロスだ。

「まったく。そんな遠くないんだから自分で行けよな！」

この人には、信治もついグチを言いたくなる。

急いで他の集金先を回り、例の両替も届け、時間は午後二時三十分。

「なんとか間に合ったな。ってか時間余ったくらいだ。」

残す先は一軒だけ。

「どうすつかなあ。。」

お金を締める為、遅くても三時半には帰らなければならない。

それ以上かかるならば、一旦お金を締めた後、また金を持たないで回るしかない。

残り一時間。行く先は一軒だけ。だがそこは、田子のおばあちゃんの家だった。

「行っちゃえ！」

一時間もあれば、なんとかなるさ。そう考えたのだった

「遅くなりましたー!!」

時間は午後四時二十分。

信治は慌てて帰ってきた。

「伊藤！遅いぞ！」

代理に怒鳴られた。

「また田子のばあさんだな？」

係長はわかってくれている。

「まったく、しょうがないな。伝票とかあつたら、よこしな！」

野田が手伝ってくれた。

「シンちゃん、お金数えるよ。」

木下も助けてくれる。

「私、コーヒー煎れとくから。」

草野も。

「俺も、あのばあさんには苦勞したんだ。五時半までかったんだから！」

と、長谷川。

「あの時は心配したよ。事故にあったんじゃないか！ってな。」

と、次長。

「もう少して、警察呼ぶところだったよな。」

と、代理。

みんな笑っていた。

支店長は相変わらず無口だったが、静かに後ろから見守ってくれている。

職場というより、まるで一つの家族のようだった。

（家族 そうだ。家族を金で買えるか、って言ったら、無理なんじゃないか？金で家族は買えない。なら家族は、金より大事だってことだ！このみんなは、僕の家族のようなもんだ。決して金では手に入らない、家族だ！）

信治の心の中で、希望の花のつぼみが、確かに膨らんでいくのを感じていた。

それから少し経って

野田が、会社をチヨクチヨク休むようになった。

誰も、そのワケを言わなかった。

信治も、他の人ならともかく野田さんなら。と、特に気にしていなかった。

たまに来て、なんだか元気がない様子。

（そんなに休むなら、辞めちまえいいのに。人手が足りなくなつて迷惑だ！）

信治はそう思っていたが、一番負担のかかる木下や立花代理は、文句一つも言っていないかった。

（なぜだろう？木下さんはともかく、仲が良さそうでもなかった立花代理まで何も言わないなんて。 ）

そのワケは、眩しい太陽が照りつける、八月に入った頃にわかった。

「信治、落ち着いて聞けよ。」

いつになく強張った口調で、係長が伝えてくれた。

「野田さんがな　　亡くなった。」

「え！？どうして？」

「最近よく休んでいたろ。心臓が悪かったそうだ。昨日急な発作が

きて、そのまま。」

「そうだったんですか。」

「明日の夕方六時から葬式がある。いいか、明日はなるべく早く帰って来いよ。みんなで葬式に行くからな。」

「わかりました。」

（野田さんが 死んだ！？こんな急に！？確かに最近休んではかりだったけど、でも出勤したときは、いつものように僕に

「遅い！」とか

「下手くそ！」とかって憎まれ口をたたいていたのに。）

翌日、信治は約束通り早く帰ってきた。

二時半には自分の仕事を終え、中の仕事も手伝い、そしてみんな早めに職場を後にした。

五時半を回り 残ったのは係長と信治だけだった。

「係長、なんか手伝えることありますか？」

「いや、いいよ。俺ももうすぐ終わるから、先に行つてな。場所、わかるよな？」

「はい 係長、僕も葬式に出た方がいいですかね？」

「当たり前だ。早く支度しな。」

「野田さんは、僕になんか来て欲しくないんじゃないかな。嫌われてみたいだし。いつもいつも文句ばっか言ってるさ。いや、僕だって悲しいですよ。でも、嫌いな人に揉まれても嫌だろうし。」

「バカヤロー！！野田はな、信治のことを認めてたんだぞ！！」

「え？」

「去年、信治が草野に言ったことがあるだろ。他の人のミスを一生懸命誤るなんて、普通できないって。しかも、野田もみんなも聞いているなかでさ。あの後、野田がなんて言ったと思う？」

「さあ どうせ文句なんじゃないですか？」

「そう思うだろ？野田はな、骨のある新人が入って来たって、喜んでたよ。育て甲斐があるってな。」

「ウソだ。だって野田さんは、いつも叱ってばっかで、いつも厳しくて、いつも『遅い！』とか『そんなのもできないの！？』とかって言うてくるのに。」

「そう、野田はそうやって信治を育てていた。自ら嫌われ役になって、信治を鍛えていたんだ。簡単なことじゃないぞ。俺にはできないなあ。自分は嫌われて陰口言われても、新人を育てる為にそれを貫くのは。」

「。。。」

「よし、行こうか。野田が待ってるぞ。」

係長と一緒に野田家にやってきた信治。中には、喪服姿の人が大勢いた。

係長が先に、野田の遺影の前に座り、手を合わせた。続いて信治も遺影の前に座る。

「野田さん、僕は正直あなたが嫌いでした。だっていつも僕にばっか厳しくて、うるさくて、でも、おかげで仕事が速くなりました。丁寧になりました。ちょっと難しい仕事も、覚えることができました。今思えば、『遅い！』って怒鳴った後は、いつも僕の仕事を手伝ってくれていましたね。『そんなこともわからないの！？』って呆れた顔をした後は、細かい所までそれを教えてくれていましたね。あなたは、高校を出たばかりの未熟な僕に、仕事の厳しさを教えてくれた。忍耐と根性を叩き込んでくれた。本当に お世話になりましたあー！！！」

信治は、手を合わせたまま、目をつぶったまま、泣いた。

「うつうつ。うつ。」

信治の声は、静かな会場を駆け回り、それは他の人達の涙も誘った。草野もその中の一人だった。

野田の写真は笑っていた。なんだか、喜んでいるように見えた。

「信治、この後飲みに行くか！俺がおごるからよ！」

係長が背中をポンと押して、酒に誘ってくれる。

「はい。」

まだ涙目の信治は、素直に頷いたのだった。

野田がいなくなったからか、四月に異動が少なかったせい、十月に大幅な人事異動があった。

駅前支店も、もちろん。

草野、長谷川、立花代理。この三人が異動になった。

代わりに来た三人は、預金係に、この年入ったばかりの女性、川村さん。渉外係に、木村係の二つ下の男性、寺道さん。そして立花代理の代わりに、沢井代理。

「伊藤さん。この通帳に付いてる定期の解約って、どうやるんですか？」

川村は話しかけやすい為か、信治になんでも訊いてくる。

「まず、普通の定期預金の解約と同じように」

信治にとって、後輩ができたのは嬉しいことだった。

かわむらゆうな

川村優奈小柄で、まだ子供っぽい顔をしている。

見た目とは裏腹に、負けん気が強く、頑張り屋だ。

「伊藤君。酒は好きかい？」

寺道も小柄で、信治にとっても話しかけやすい人だ。

仕事はそれなりにできるが、おっちょこちょいなところもあり、たまに変なところでミスをする。

それもまた、彼の柔らかいイメージにプラスとなっていたりした。

「酒が好きというより、飲んだときの雰囲気が好きですかね。」

二人はすぐ仲良くなっていた。

この二人は全く問題はない。問題なのは、沢井代理だ。

「伊藤、ちょっと。」

沢井代理は、優しい声と笑顔で信治を呼び出す。

「お前、今月ローンの案件いくつもってきた？」

「まだ、無いです。」

「無い！？お前なあ、両替やら入金やらやってても意味ないんだよ。お前の給料、どうやって稼いでると思う？」

「ローンの利息、とかですかね。」

「そうだろ？だったら金借りる先、見つけてこなきゃ話にならないよな？」

「はい。」

「だったら、そこらのおばあちゃんの家とかで、ゆっくりしてるトマなんて、ないよな？」

「はい。」

「お前、一番取りやすいローンはなんだ？」

「カードローン、ですかね。」

「だよな。どうやってとってくる？」

「持っていない人に、どんどん勧めていきます。」

「わかったら、やれ。」

「はい。」

沢井代理は、完璧な作り笑いで、いちいち疑問系で、わかってる事を長々と説教してくる。

これは 腹が立つ！！

（やってるけどとれないんだよ！！いちいちわかってる事言っんじやねーよ！！上司なら、部下にやる気であるような言い方しろってんだよ！！）

と信治もキレ気味だ。

（はあーあ　野田さんは良かったな。実になる怒り方してたからなあ。沢井代理、なんだありゃ。本当にやる気無くなりそうだよ。）
同じ怒ることなのに、何かが違う。確かに野田に怒られ、信治もムツとしていた。が、沢井代理に怒られた時は、ムカツ！！とする。この差は何だろう？

やはり、人を育てようと言う言葉と、ただ頭にきて言う言葉とでは、言われた人の受け取り方は違うようだ。

「あの頃は良かったなあ。」

アパートに帰った信治は呟いた。

「家族みたいに思えたもんなあ。」

たった一人、会社に嫌な人がいる。それだけで、会社に行くのが、恐ろしく嫌になる。

信治は今それを痛感していた。

そんなある日、信治の好きな着メロが鳴った。
克也だ！

「もっしー。」

「おう、信治か。」

「そりゃあね。」

「おう、久保の話聞いたか？」

「あいつがどうかしたのか？」

「ああ、久保のやろう、結婚したつてよ。」

「結婚！？あんなヤツがよくできたなあ。」

「聞いた話だけど、久保、昔から金もちじゃん。」

「そうだね。」

「それ目当てらしいぞ。」

「金目当てってこと？」

「そう。」

「そんなんでいいのかよ。」

「かわいいからいいんだつてさ。」

「へえー。」

「もうすぐ、子供も産まれるそうだ。」

「ふーん。まあどうでもいいけどね。」

「まあな。んじゃ、それ言いたかったただけだから。」

「あつそうなの？」

「そう。じゃあね。」

「はいよ。」

電話を切って考えた。

「妻に子供、家族が　ハハツ、ハハハ。なんだ、金で家族、手に入るんじゃない。そうか　結局金かよ！！」

金で買えないものなんて　ないんじゃないか？

信治の頭の中に、イヤな予感が走った。

希望の花のつぼみは、その花を開く事無く、静かに散っていったのだった。

第五話：友

「うー 寒い寒い。」

目が覚めるような鮮やかな紅葉も終わり、心も体も凍えそうな風が吹く秋の夕暮れ。

そんな中一人、ショッピングモールの駐車場で震えてたのは、加藤さんだ。

その人は二十代半ばの女性で、信治の集金先のお客さんであった。

「あれ？加藤さん。何してるんですか？」

その日休みだった信治は、たまたまそこで出くわしたのだった。

「あつ、伊藤さん。今日休み？」

「そうですよ。日曜日ですもん。」

「いいなあ、こっちはむしろ忙しいつつのに。」

「ハハハ、稼ぎ時ですもんね。今仕事終わったところですか？」

「そうなんだけど、迎えが来ないんだよねー。まったく、何やってんだか！」

「旦那さんですか？」

「そう！約束の時間過ぎてるのに来ないし！ケイタイとまってるから連絡つかないし！こんなに寒いのに！あーイライラするわ！」

「それはお気の毒に　でも、イライラしててもしょうがないから、プラス思考でいたらいんじゃないですか？」

「こんな状況で、どうプラスに考えんのよ！」

「そうですね　例えば、空を見るとか。なかなかゆっくり空を眺める時間なんて無いじゃないですか？この白い雲がゆっくり流れていく様子とか見てると、意外と心地よかったですよ　なんてね。」

「　ありがとう。考えとくわ。」

「ではまた。」

「うん。」

信治がいなくなった後、加藤は空を眺めてみた。

「空ねえ　　空って、こんなキレイなものだったかしら　。」

それはどこまでも青く、どこまでも広く、まるでイヤなこと全て吸い込んでくれたかのように、心を和ませたのだった。

信治が仕事で廻る学校に、信治のメツチャクチャタイプの女性がい

た。
名前は、まつもとけいこ松本恵子。

顔は小さいが目が大きい。
体は小さいが胸が大きい。

完璧だった。その学校で会う度、二人はよく会話をしていたのだが、ある日話が弾んで、今度二人で食事に行こう！なんてことになったのだった。

信治にとってはまたとないチャンス！しかし相手がどう思っているのかは、全くわからない。
信治は悩んだ。

（初めての食事会だ。変な事は言わず、普通に楽しもう。 いや、せつかくのチャンスだ。せめてメールアドレスくらい訊いてこう！ いやいや、こんな機会も無いかもしれない。思い切って告げしまえ！！ どうしよう？）

そんなとき、こんなとき、持つべき者はヤッパリ友達だ！

「で、いつ会ったんだ？」

克也はいつものように、信治のアパートで酒を飲んでいた。
もちろん信治もだ。

「今週の日曜日。」

二人とも金に余裕がない為、いつも通り安い酒と、簡単なつまみだけの宅飲み。
それでも十分だった。

「告っちゃえば？」

「そう簡単に言つなよ。二人きりでメシ食うだけでも緊張するだろうし。」

「でも好きなんだろ？」

「うん。」

「人生いつどうなるかわからないし、やらないで後悔するより、やって後悔しろ！ってな。自分から動かなきゃ、始まらないものもあるんじゃないか？」

その言葉は、信治のくすぶっていた心に、強い真つ赤な意志の炎を燃え上がらせたのだった。

決戦の朝。信治は持っている服の中で最高の組み合わせを選び、車へと乗り込んだ。

途中で例の彼女を乗せ、その時点ですでに、信治の緊張は最高潮に達していたのだった。

そして

「僕と、付き合って下さい！」

意外とすんなり言うことができた。

彼女は突然の告白に驚いていたが

「で？どうなった？うまくいったのか？フラレタのか？？」

電話の向こうの克也は大興奮だ。

「ダメだった。」

「そうか。」

一気に興奮が冷めた克也。
それを確認して信治が一言。

「ウツソだよーん！」

「はあ！？なに？じゃあ付き合えたのか？」

「そう！」

「んだよ！いらなくへこんだじゃねーかよ！ふざけんな！」

「ハハハ。まあ克也の励ましのおかげかな？」

「そりやそうだろ！今度なんかおこれ！」

「いいよ。」

「で、彼女に会わせろ！」

「いいよ。」

電話越しにテンションが上がる二人。
しかし、その二人の約束は、叶わなかった。

「はあ！？東京に行くって！？いつよ。」

「明日。」

「明日！？」

信治が驚くのもムリはない。あの電話から一週間も経っていないのだ。

その日も電話で、結局会うこともないまま、克也は東京に行ってしまった。

「毎度様です！」

「やあ、いらっしやい。」

鈴木のおじいさんはいつものように、定期積金の証書とお金を持って来た。

「よし、と。はい、どうぞ。」

信治がパパッと仕事を済ませると、鈴木さんは妙に信治の顔を眺めていた。

「あれ？なんかついてます？」

「いやいや、いつもより表情が明るいと思ってね。これは 女ができたな。」

さすが、長く生きているだけあってか、鈴木さんは見事に言い当てたのだった。

「え わかります？」

「はっはっは、何となくな。まあいいじゃないか。隠すことでもないだろう。」

「はい。」

「でも慎重にな。」

「何を、ですか？」

「『幸せは女から、不幸も女から』って言ってな、幸せも不幸も女房しだいってことだ！」

「まだ結婚するって決めたわけじゃないですよ。どこのことわざですか？」

「アルジェリアだよ。」

「へえー、いろいろあるんですね。」

「それからな、『女心は南風』って言ってな」

と、女に関することわざをさんざん聞かされ

（まだ付き合っただけなんですけど。）

なんだか頭が痛い信治であつた。

「ごめんください。」

「あら、シンちゃん。いらっしやい。」

佐藤のおばあさんは、当たり前のように昼ご飯を出してくれる。

「いただきます!」

信治は喜んでそれを頂いた。

「シンちゃん、なんか良いことあつた？」

「わかります?」

「顔に書いてあるよ。」

「実は最近彼女ができて。」

「ふふふ、やっぱりね。」

（やべー バレバレだ ちょっと気合い入れてこ。）

しかし次の家でも。

「あら、風信さん。なんか良いことでもありました？」

（はりや???）

信治の心境は読みやすいらしい。

「ふーん。」

電話越しの克也の声はなんだか暗い。

「そしたら、アザラシがケイちゃんの側から離れなくなってさあ！」

対して信治のテンションは高い。

「へえー。」

「アザラシも可愛かったけど、その時のケイちゃんの顔は、マジ、可愛かったなあ。」

「ほおー。」

「なんだよ！さつきから適当な返事ばっかしやがって！」

「そりゃあ信治のノロケ話ばっか聞かされたら、返事も適当になるわい！」

「そうか　素直にゴメン。」

「　謝られてもなあ。」

克也が東京に行ってから、二人は今まで以上に電話やメールをするようになった。

いつもそんなだと、全然遠くにいる気がしないもんである。

「ところで、そっちはどうよ？」

「どうつても　別に。」

「言葉が通じなかったりとか、ないの？」

「あー！それはあるある！」

「どんなん？」

「普通マンガ本は『マンガほん』だろ？」

「そりゃあ『マンガほん』だわな。」

「違うんだよ！『マンガぼん』なんだよ！」

「なにー！？いや、『マンガぼん』でしょ！」

「違うんだって！『マンガぼん』なんだって！」

いつも気付けば長電話。今日は信治からかけたから、もちろんその分電話代がかさむ。

ギリギリ生活の信治にとって、それはけっこうな痛手であった。最近『ケイちゃん』と呼べるようになった彼女と、水族館に行ったのも痛い。

でも信治はそれでいいと思っていた。親友との話。彼女とのデート。これ以上ない贅沢な時間に金を使っているのだから。

「では、伊藤君。お疲れ様です！」

「お疲れ様です！」

と乾杯して、伊藤と寺道はビールを飲む。

だいたい二週間に一度は、こうやって二人で飲みに来ていた。

「どう？彼女ができて。やっぱり楽しい？」

「はい、そりやもう。」

「そうかあ、いいなあ。僕にも誰か紹介してよ。」

「うーん 誰かい人いるかなあ どんな人がいいんですか？」

「僕より一個か二個年下たで、かわいければ誰でもいいよ。」

「寺道さんの一個か二個年下ってことは 二十八、九ですか 知り合いにいるかな？」

「期待してます！」

「うーん。」

いつも割り勘。たまに寺道がおごってくれる。
だがこの日だけは、信治のおごりだった。二人でパチンコ屋に行つて、信治だけ勝ったからだ。

「伊藤君、スロット強いよね。目押しもうまくなったし。」

「たまたまいい台に座っただけですよ。」

寺道によく誘われるので、信治もすっかりパチンコやスロットに詳しくなってしまった。

「関係無い話だけどさ、伊藤君、そろそろ二十歳だっけ？」

「はい、あと三カ月ですね。」

「二十歳になったら、金借りれるよ。」

「いや、怖いから借りないですよ。」

「便利だよ。いざというときの為に作っておけばいいのに。」

「えー！？イヤですよ。」

「簡単にできるんだよ。ほら、新町の電気屋の近くにいつぱいあるじゃん。あのハコに入って、三十分もあれば」

「作りませんって！」

寺道はすぐ変なことを教えてくる。

それでも信治は寺道を慕っていた。友達でもない、兄弟でもない。だが二人の間には、互いを助け合い、励まし合って生まれた堅い絆があった。目には決して見えない、絆というもので繋がっている。少なくとも信治は、そう信じていたのだった。

早いもので、克也が東京に行ってから、もうすぐ一年が経つ。

結局、ゴールデンウィークもお盆も、克也は帰って来なかった。

それでも、二人の関係が壊れる事はなかった。むしろ、離れていても常に連絡を取り合っていると、逆に結束力が強まった気がした。

そんなある日

いつものように、仕事が終わってから克也の電話。

いつものように、陽気に電話に出る信治。

しかし、電話の向こうの克也は、いつもとは様子が違っていた。

「信治ー！どうしよう？助けてくれ！」

「な、なに？どうした？」

「ハアー　　信治ー　人ひいちゃった。」

「はっ！？車で！？」

「ああ。」

「それで？」

「とりあえず示談で済んだんだが、その、金が。」

「いくらよ。」

「三十万。」

「三十！？　　さすがに、それは」

「無理だよなあ。」

「うん　　待てよ？」

信治は思い出していた。寺道が言っていたこと。金の借り方を。

「克也！いつまでだ？」

「明後日。」

「よし、わかった！俺が何とかする！何とかすからな！待ってろよ！」

次の日。

信治はさっそく、寺道が言っていた『ハコ』の前へやって来た。

「なんか 緊張するなあ。」

なんだか『入ってはいけない』オーラが出ているのを感じながら、それでも信治は足を踏み入れた。

当たり前かもしれないが、中には誰もいない。機械と、用紙と、ペ
ンがあるだけ。

信治はホッとした。

機械の言うとおりに、用紙に記入、簡単な機械の打ち込み、そして
免許証のコピーをした。

やがて審査が終わり、カードが出てきた。
本当に、三十分足らずで出来てしまった。

カードには、三十万の申込みだったのに、五十万までの限度額がつ
いてきた。

しかも、それを今すぐ、全部引き下ろすことができちゃうのだ。

「なんて便利！　じゃねーよな。なんて恐ろしいんだ。全く！
ハア、借りてしまった。」

人生が一段階悪い方へ進んだ。そんな気分になった。

「　　ってことで、送つといたからな！」

「マジで！？いやーホント、わりーなー。」

「いいんだよ。困ったときはお互い様、俺ら親友だろ？」

「ああ、ありがとな。必ず返すから。毎月少しずつでも、必ず返す
からな！」

電話をする信治の隣には、恵子がいた。

彼女には隠し事はしたくない。

信治は借金をしたことも、そのワケも、ちゃんと彼女に伝えていた。

「でも大丈夫？三十万なんて大金、返ってこなかったらどうするの
？」

「大丈夫だよ。あいつは親友なんだ。ちゃんと返してくれるさ。」

「でも、金の貸し借りで友情が壊れる事って、けっこうあるみたい
よ。」

「大丈夫。金なんかで僕らの友情は壊れやしないよ。金なんかで。」

金 正直、信治は自信がなかった。しかし、幼い頃から知っている克也なら、きっと大丈夫。きっと大丈夫だと信じていた。

ギリギリ生活の信治に、さらに毎月の利息を払う余裕なんて、あるワケがない。
ならどうする？

答えは簡単。まだ残っている限度額、二十万から少し下ろして払えばいい。

だが、そうやって払っていけば、もちろん借金は増えていく。
あつという間に、五十万手前までできてしまった。

信治が金を貸して、次の月も、その次の月も、さらに次の月も、克也からの入金はなかった。

それどころか、メールも返ってこない。電話にも出ない。
そうしてさらに三カ月が過ぎた。

「克也 何やってるんだ!？」

信治はダメもとで、もう一度克也に電話をかけたのだった。

「 おかけになった電話は、現在使われておりません。番号を確認のうえ、もう一度 」

それは、東京のどこにいるかわからない克也に、連絡を取る方法が全くなかった事を意味していた。

信治はそこで、そこでようやく気付いた。

金の返ってくる可能性が、限りなくゼロに近づいたことを。

「 なんてだよ なんてだよ！克也ー！！！」

そして、信治の心の闇は、これを機に、さらに加速して広がることになるのだった。

第六話：絆

いつもの職場。

いつもの顔。

ただ一ついつもと違うのは、寺道がやけにニコニコしていることだった。

「寺道さん、なんかありました？」

「ん？いや、別に。後で話すよ。」

（はてな？）

信治が不思議がっていると、木村係長がこっそり教えてくれた。

「寺道な、彼女ができたらしいぞ。」

「なーるほど、どうりで。」

（そうか、僕も彼女ができた頃、あんな感じになってたんだな。うーん 恥ずかしい。）

寺道は、バカみたいにハイテンションだった。

「伊藤君。僕にもついに、彼女ができたよ！」

「おめでとつございます。」

「なんだ。もつと驚くかと思ったのに。」

「実は係長からチラツと聞いて。」

「そうなんだ。」

「そうなんです。でも大事にしないとダメですよ。寺道さんにはこんなチャンス、二度とないですからねえ。」

「なんだとお！」

と、信治をこちょがして笑う寺道。

「ねえ、伊藤君。今度伊藤君と彼女と、僕と僕の彼女と四人で、どこか旅館にでも泊まりに行かない？」

「いいですね！ゴールデンウィークも近いし。あれ？寺道さんの彼女って、なにしてるんですか？」

「ん、フリーターだよ。」

「じゃあその時なら、みんな休みですよ！」

「じゃあ決まりだな。」

でも信治には心配事が一つあった。金の事だ。なんとか利息を増やさないでやってきたのだが、こうなったら仕方がない。信治はあることを決めた。もう一枚、カードを作ること。

「伊藤君。ちょっと来て。」

沢井代理に呼ばれると、何もしていなくても、怒られたような気分になって、胃が痛くなる。

「はい。」

沢井は信治に、ある紙を渡した。

「いいか、これに名前が載っている人は、みんなローンの延滞先だ。今から行って回収して来い！」

「今から ですか？」

時計は夕方の五時を回っていた。

「日中に回れって言っても、どうせ回りきれないだろ？」

「はい 行きます。」

確かに沢井の言うことは正しいかもしれない が、そう決めつけられてるのもやっぱ、ムカつく！

しぶしぶ信治は外へ出た。

雪は消えても、まだ暗くなると冷え込む時期だ。

「うつうつ 早く回って終わらせよ。」

まず一軒目。

「ごめんくださーい。風信ですが。」

「ああ ローンの事だろ？」

「はい。」

「いやーすいませんね。今週ちょっと使う用が出来て
来週には
払いますんで、それまで待つてくれませんか？」

「わかりました。来週ですね。」

二軒目。

「ごめんくださーい！」

しーーーーん

「こんばんは！」

しーーーーん

（いない？留守？電気はついてるけど？？まっ、いっか。）

三軒目。

「ごめんくださーい。」

「はいよ。」

そう言っ出てきたのは、田村さん。白髪でヨボヨボのおじいちゃんだ。

「あつ、風信ですが、ローンの支払いをお願いしに来ました。」

「そうか。ふー 見ての通り、年寄りが一人暮らしているだけ。家もボロボロ、食うのもままならね。今払うのは無理だの。」

田村の言つとおり、家は地震でもきたら潰れそうだ。家の中を見ても、金目になりそうな物は一つもない。

「では、いつなら払えますか？」

「年金が入るまで待つてくれんか？」

「すると 来月ですかね。」

「そうだの。」

タタツと何かが走る音がして、信治が振り向くと、そこには全身真っ白なネコがいた。

「田村さんのネコですか？」

「ああ。今では唯一の家族だの。」

「かわいいですね。来い来い！」

ニヤー、とネコは信治の元へやってきた。

ネコのあごの下を撫でてやる信治。

よく見れば、ネコの毛は汚れていた。白ネコのハズが黄土色に見えた。

「じゃあ、また来月来ます。」

信治は、それから数軒回って会社へと戻った。

「なにー！？一つも回収できなかったのか！！」

「はい。みんな金が無いようで。」

「はあー それじゃあいつまで経っても回収できないだろう？」

「はい。」

「それをなんとか回収してくるのが、お前の仕事じゃないのか。そうだろう？」

「はい。」

「じゃあ明日、また行つて来い！」

「でも田村さんは、年金が入るまで無理みたいですよ。」

「あのおじいちゃんか。」

「はい。」

「じゃあどうやって飯食ってんだ？」

「？」

「確かネコも飼ってたよな。」

「はい。かわいいネコがいました。」

「ネコ飼う余裕があるのに、ローン払えないのはおかしいと思わないか？」

（いや、ネコだってガラガラだったし おかしいなんて思わないけどな。）

「いいか、ネコと、自分と、飯食う金があるなら、それをよこせと言ってこい！」

（それじゃあ生きていけないじゃん！）

「わかったのか！？」

「はい。」

次の日も、信治は延滞先を歩かされた。

「というワケなんで、延滞分払って頂けますでしょうか。」

「まったく！あんたらは、金貸す時はあんないい顔して、ちょっと払えなくなるとすぐ取り立てに来る！ふざけんじゃないわよ！」

「　　すみません。」

「はー　　さて次は　田村さんか。」

「　　こんばんは。」

「あれ、また来たのか。来月まで払えんと、言ったハズだがの。」

「そうなんですが、その　　あの、どうやって飯食ってってますか？」

「は？」

「あ、飯食っていく金があるなら、それを貰おうかと。」

「じゃあワシらに死ねと！死んでも払えと言うのか！」

「いや、そう言うワケでは。」

「帰って頂けますか！」

「　　。」

トボトボと帰る信治。

「なに！？もらえなかったじゃないだろ？延滞するヤツはそうやって、ずっと延滞してくんだよ！払うまで毎日行って来い！」

「。」

沢井の言葉が、信治の心にさらに追い討ちをかけてくる。

「毎度様です。」

「おや？なんだか元気がないな。なんかあったな。」

鈴木のおじいさんは、まるで人の心が読めているかのようにだった。

「いや、大した事ないんです。」

「スリランカのことわざでな、『小川はけっして海にはならない』というのがある。小さなものは大きくならない。頑張ってもどつしようもないこともある。だから小さな悩みにクヨクヨしても仕方がないってことだ。」

「頑張ってもどつしようもないこともある、ですか　ありがとうございます。」

何も知らないハズの鈴木という言葉は、信治の中のモヤモヤを、ほんの

少しだけ取り除いたのだった。
でもそのほんの少しのおかげで、その後の仕事は明るく回ることができた。

さて、五時を回り

「ごめんください。」

田村の家だ。

「君か まあ入りなさい。」

田村は初めて、信治を玄関より中へ入れた。

「昨日は悪かったの。追い帰したりして。」

「いや、こちらこそすいません。失礼な事を言つて。」

「君ら、上の指示で動いている者に、文句を言うのは間違いだ。それくらい、わかつてはおるんだがの。」

「あの、なんで借金なんかしたんですか？」

「息子の借金だ。」

「え？」

「息子の連帯保証人になったのはいいんだが、払えなくなつてどこか行つてしまった。」

「どこにいるかも、わからないんですか？」

「そうなの。」

「。」

「息子がいなくなり、やがてワシも働けなくなり、残ったのは借金だけ。自分の子供の事だ。仕方ない事だの。」

「そんな。」

「もう働くこともできんし、飯食う金ももってかれるなら、もうクビでも吊るしかないの。」

「やつ、そんな、そんな事言わないで下さい！なんとか延ばせるように話して来ますから！そんな悲しいこと、言わないで下さいよ！」

「お前さんは、いい人だの。明日、またこの時間に来なさい。待つとるよ。」

次の日、約束の時間。

信治は田村の家の前にやって来た。

だが、信治の足はそこで止まってしまった。本当にクビを吊っていたら、そんな事が、頭から離れなかったからである。

「ごめんください。」

恐る恐る、信治は玄関のドアを開けた。

「やあ、待ってたよ。」

田村の声を聞いて、ホッと力が抜けた。

「ほら、これで足りるじゃろ。」

田村が差し出したのは、金だった。

「足ります 足りですけど、どうやって？」

「お前さんに言われて、恥を覚悟で近所の家を回ったの。なんとか借りる事ができたんじゃない。」

「そうなんですか 良かったあ。僕は本当にクビ吊りでもしてるかと思っで、本当に心配したんですよ。」

「お前さんのような若い人に、そんな嫌な思いはさせんよ。人間、その気になれば、なんとかなるもんだの。」

田村はそう言っで笑った。

ネコも近づいてきて、笑ってるように見えた。
信治も笑っで 少し泣いた。

「わー、着いたね。」

「いい所ですね。」

「景色きれい。」

「ホテル大きいねえ。」

信治と恵子、そして寺道と、その彼女の良江は、四人で泊まりがけの旅行に來たのだ。

ゴールデンウィークの為か道が混んでいて、けっこうな時間を要した。

そんな中現れたこの景色、四人の疲れを一気に吹き飛ばすほどだった。

青々とした木々のざわめき。澄んだ川の流れ。遠くに見下ろす街並み。ほんのり冷たい空気を運ぶそよ風。とにかく絶景と呼ぶにふさわしい場所であつた。

さて、夕食はバイキング。

寿司やステーキ、刺身、タラバガニ、スパゲティやチャーハン等々

どれも高級そうで、どれも美味しそうな食べ物、全部食べ放題！みんなのテンションは一気に上がった！

そんな中、信治が大量に持ってきたのは、なぜかゆで卵

（こんな高級そうな食べ物に囲まれてるんだ。きつとゆで卵も、超美味しいハズ。）

そう思ったのである。
しかし

（ やべえ 超普通だ ）

ゆで卵で腹が一杯になり、他に手が出せなくなる信治であった。

さてさて、夕食が終わり、みんなは風呂へ。

これまた景色が最高の大浴場で、それぞれテンションが上がる一方だった。

夜は四人集まって酒を飲んだ。

とにかく寺道が上機嫌で、恵子も、良江も、みんな楽しそうだ。

やがて女性二人が寝てしまうと、信治と寺道は窓辺のイスに座り、二人だけで酒を交わした。

「寺道さん。仕事、辞めたいと思った事がありますか？」

「僕なんか、しょっちゅうヘマして怒られるからね。その度に辞めたいって思うよ。なんかあったのかい？」

「なんか、仕事っていうことが、よくわからなくなりました。俺、仕事は人の為になることだと思ってたんです。人と人が助け合って生きていく。そういうことだと。」

でも最近は、そうは感じない。金持ちにペコペコして、金が無い人に取り立てに行って、そんなの、ただ会社の為にしかないじゃないですか！！結局、金の無い人は苦しいままじゃないですか！！

金持ちばかり偉そうで、そんなんじゃ、世の中良くならないじゃないですか！！　俺は、そんなの嫌です。」

「確かに、金持ちは偉そうなのが多いね。でも、中にはそうじゃない人もいる。金持ちでも、すごく優しい人もいるし、貧乏でも、コツコツお金を貯めて、風信さんのおかげで助かったって、そう言ってくれる人もいる。」

僕はそういう人がいるから、まだ辞めないで頑張れるのかもしれない。でもね、伊藤君が辞めたいなら、辞めればいい。まだ若いし、いろんな経験をする事は、とても大事だと思う。自分で選んだ道に、間違いなんてないんだから。どの道を選ぶかは自分次第。後悔しても、失敗しても、自分で選んだなら納得できる。そしたらまた、次の道を探せばいいさ。」

街を見下ろす高い部屋。夜景がとてもきれいだ。信治の目に映る夜景は、光がにじんで、やがては見えなくなった。

いつからか目が覚めていた惠子は、二人の会話をコツソリ聞いている。盗み聞きしていたワケではない。ただ、二人の邪魔をしたくなかっただけだった。

朝、四人は帰り支度をしてロビーに降りた。

「ねえ、コレ買ってよー。あと、コレも欲しいなあ。ねえ、お願い。」

良江が、売店で何か欲しいものを見つけたようだ。

「わかったよ。しょうがないなあ。」

寺道は、言われたものの全てを買ってあげていた。

信治は感じていた。イヤな予感を。

「いやあ、この前は楽しかったね。」

「また行きたいですね。」

旅の思い出話は、何年経っても楽しいものである。
寺道と信治は、久しぶりに二人で飲んでいた。

最近付き合いが悪くなった寺道。毎週一度はやっていた飲み会も、
今は月に一度有るか無いかである。

「ねえ、伊藤君。お金に余裕ないよね？」

「え？あるわけじゃないですか。」

「だよー。」

「んー。」

信治が目を覚ますと、もう昼の二時だ。ひどい二日酔いの中、なんとか起き上がった信治は、隣にいるハズの寺道の姿が無いことに気が付いた。

「あれー 寺道さん？」

どこにもいない。そして、なぜか信治のキャッシュカードがテーブルの上に置いてあった。

まさか！

信治は急いで電話をかけた。相手はもちろん寺道だ。

（そういえば、やたらカードの残高を訊いてきていた。酔った勢いで暗証番号も教えた気がする。でもまさか そんなハズないよね？寺道さん。）

「もしもし？」

「伊藤君 ごめん。」

その瞬間、信治は理解した。同時に、心がバキバキと音をたてて碎けるのを感じた。

その後寺道が言った言葉。信治はあまり覚えていなかった。

彼女がどうしても、東京に行きたがっていると言った事。

そのため、アパートを借りる資金が必要だったと言った事。

ちゃんと相談したかったけど、言えなかったと言った事。

絶対返すから、と言った事。

本当にごめんと、何度も謝っていた事

信治には、もうどうでもよかった。ただ自分で、最後に口にした言葉は覚えていた。

「いいですよ。前にもそんな事あったんで。返さなくてもいいですよ。あげますよ。ただもう二度と電話しないで下さい。メールもしないで下さい。」
さようなら。」

ピッ、と電話を切ると、早速寺道からの電話を着信拒否にした。アドレスも変えてしまった。

寺道が勝手に持っていた金は、三十万。カードは一気に限度額近くまでいった。それでも信治は焦らなかった。

また新しくカードを作ればいい

ただ、そう思ったのだった。

第七話：愛

「ケイちゃんは何が見たい？」

「うーん アクション映画もいいけど、こっちも見たいし
信治は？」

「僕はケイちゃんが見たいのなら、何でもOKだよ。」

「じゃあ コレにする！」

「 んじ 信治！」

「ん？ ああ、あれ！？寝ちゃったのか どうだった？映画。」

「面白かったよ。後半は。もう、寝ないで見ればよかったのに。」

「ごめんごめん。途中つまなくて、いつの間にか寝たみたい。」

「んー！」

「腹減ったな。」

「なんか食べようよ。」

「何がいい？」

「いろいろあるねえ 寿司もいいけど中華もいいし あっ！ラーメン美味しそう。このカツも食べたいなあ。」

「で どれにすんの？」

「信治は？」

「僕はなんでもいいよ。」

「じゃあ、ラーメンにする。」

「うん 美味しい！」

「さすが！ケイちゃんの選んだ店に間違いはなかったね。」

「でしょ？ふふふ。」

「このぬいぐるみかわいい！取って取って！」

「まかせとけ！-！」

「んー、無理！」

「じゃ、コレは？」

「それはいけそう
いよ。」
ダメだ。ここのUFOキャッチャー力が無

「私やってみる。」

「無理だつて。」

「うまいね。」

「取っちゃった。」

「なんか悔しいな。よし、アレ取ってやる。」

「取れた？」

「うるせー！取れねーよ！」

「ふふふ。私の勝ちだね。」

「じゃあ、ボーリングで勝負！」

「いいよ。」

「よっしゃ！ストライクだ。どうよ？」

「んー 真っ直ぐいかないよお。」

「投げる時に、手が曲がってしまうからダメなんだよ。ここでコレをこうやってだな。」

「やったー！勝ったー！」

「ガーン。負けた。ちくしょう。いらなくアドバイスするんじゃないかった。」

「負けたから罰ゲームだよ。」

「えー！？聞いてないんですけど。」

「勝負に罰ゲームはつきものよ。」

「いいよ。何すればいいのさ。」

「私のことを、どう思っているか言っして下さいー！」

「……」

「うん。」

「やだよ！恥ずかしい。」

「さっき、いいよって言ったじゃない！」

「わかったよ。」

「ちゃんと目を見て、真剣に言うんだよ！」

「僕は、ケイちゃんのことを、心から愛してます！」

「それが真剣？」

「そうだよ。僕の本気の気持ちだよ。」

「そうか。」

「あれ？ダメだった？」

「ううん。次、何する？」

「水族館かあ。」

「イヤなの？」

「そうじゃないけど 前来たじゃん。それに金も少ないし」

「私も払うから。ねっ、行こっ！」

「わぁ 魚がキレイ。」

「うん。」

「あつ、ウミガメだ！ほら、超デカいよ！」

「そうだねえ。」

「なにその反応。つまんないの？」

「いや、この水族館そんな大きくないから、全部頭に残ってるんだよねえ そうだ！アザラシとかペンギンがいるとこ行こつよ。あれなら何度見てもかわいいから。」

「ほらかわいい！」

「確かにコレは、ずっと見てても飽きないね。」

「あつ、このペンギン飛び込みそう。」

「ホントだ！ なかなか飛び込まないね。」

「後ろからもう一匹来たよ。」

「あつ、押した!」

「あはははは 落とされちゃった!」

「かわいそ!」

「ねえ、そろそろイルカのショーが始まるよ!」

「行くっか。」

「うん。」

「わああ! やっぱイルカはすごいなあ。前見たのと、ちょっと変わってるね!」

「うん。」

「どうした? なんか泣きそうな顔して。つまんない?」

「ううん。そんな事ないよ。そんな事ない。」

「?」

「よし、帰るか!」

「うん。」

「。」

「。」

「なんか、歌でも聴くか。ノリノリのヤツがいいかなあ
ん何が聴きたい？」 ケイチや

「静かなのがいい。バラードとか。」

「よし！じゃあ僕の、激選バラードMDをかけよう！」

「。」

「？」

「着いた！今日は楽しかったね。」

「うん 楽しかった。ありがとう。」

「なんかあった？今日のケイちゃん、様子が変わったよ。」

「 私たち 別れよう。」

「！？え？なんで？どうしてそんな」

「信治は、私に本気じゃない！いつも合わせてるだけ。信治は、私のことを好きじゃない！信治の心の中には別の人がいる。本当はその人を想っているから、私がどんなに頑張っても、信治は私を見てくれないのよ！」

「なんで勝手に決めつけてんだよ。そんな そうか 金か！金が無いからイヤなんだろ！貧乏人とは付き合えないんだろ！水族館代すら払えなかったもん。さては始めから金目当てか！信用金庫で働いてるからな！金があると思ったんだろ！悪かったな、給料少なくて。理想と違ったってワケだ！」

「そうよ！金のない男なんて最低よ！ガッカリしたわ！ さようなら。」

そう言つて恵子は、車から降りて歩き出した。

信治は興奮して、何も考えれなくなっていたようだ。
恵子が泣いていた理由すら、気づかなかったのだから。

土曜日。

信治はパチンコ屋にいた。

（よし、チェリーだ！入れよ うそ！？これでハズれんのか
よ！ふざけんなー！！）

信治はスロット台を、ガン！と一発叩いて席を立った。

（あーあ、金ねえなあ また引き出してくつか。）

「おい！じじいどけよ！ひき殺されてーのか！！」

信治は苛立っていた。

スロットを打っている時も、運転している時も、そして仕事
も

「なんだか最近元気がないねえ。大丈夫かい？シンちゃん。」

「 なんか、どうでもよくなってきました。なににもかも。 」

大好きな佐藤のばあちゃんの前ですら、ロクに笑顔も出せなくなっ
ていたのである。

その日の仕事が終わり、信治はふらつと自販機まで歩いた。
タバコの自販機だ。

そして吸わないハズのタバコを一つ、適当に選んで買ったのだった。

「あー 遅せー そんなトロトロ運転するなら道ゆずれよな！」

信治は前の車を、思いっきりあおっていた。

「遅いじゃない！なにやってんのよ！」

（ほら遅くなつたから怒られる。ったく、うるせーんだよ川岸のババ。）

「だから電話で言つたじゃない！早く来てくれないと」

（うるせえ。）

「おい、伊藤！お前今月もローン取ってないよな？やる気あつてんのか？ん？」

（うるせえよ沢井 あーーうるせえー！！）

バン！！と強く扉を閉め、信治はアパートに帰ってきた。

「はあ 疲れた。」

そう言つて信治は、飯も食わず布団に倒れこんだのだった。

ある土曜日の夜。

信治は飲み屋街を、ブラブラと歩いていた。
だが、一人ではどうも入る気になれない。

（ 帰ろかな。 ）

そう思った時だった。

「いいじゃん！ちょっと一緒に飲もうよ！」

「イヤです！離して下さい！」

そんな男女の声が聞こえてきたのだった。

（あー うるせえなあ。 ）

今の信治にとって、そんなのどうでもよかったのだが、何気にそっちを向いて驚いた。

「ケイちゃん！ 久保？」

（なんだ？この組み合わせ。 ）

そう思った。

ほっという通り過ぎたかったのだが、向こうも信治に気付いたようだ。

「信治！？」

「おめーなんで一人でこんなトコいんだよ。ってか、お前ら知り合
い？」

（あーあ なんかめんどくさそう。）

信治はしぶしぶ二人に近付いた。

「ナンパでもしてんの？」

「そうだよ。わりーか？」

「いや、でも嫁子供いたよな？」

「もう別れたよ。あんな女！」

「ふーん。」

「とにかく、今いいとこなんだから邪魔すんなよ！」

（どこがいいとこなんだか　ってか、邪魔ってなに？俺が邪魔しに
きたって？）

「信治！助けてよ。」

「なんだ？お前の彼女か？おい、こいつはやめとけ。金ねーぞ！」

（うるせえ。）

「俺だったら何でも買ってやれる！好きな所に連れてってやれる！
なんでもしてあげるよ！」

「イヤ！」

「いいからちよっと来いよ！」

久保は、恵子の手を無理やり引つ張った。

「イヤ!!」

恵子は必死に抵抗している。

「ちよっとだけ、な！ちよっとだけ付き合ってよ！」

「うるせえんだよ!!どいつもこいつも!!」

信治はそう叫んで、久保を一発、思いっきり殴った！

「いでえ！ ううう。」

久保はなんか、泣きながらどこかへ行ってしまった。

「ありがとう。」

「別に。ただ、ここんとこイライラしてたから、ちよつとよかったよ。少しスッキリした。」

二人は並んで歩いた。

途中、信治はタバコを取り出すと、火をつけ、フウーッと空に煙を吐いた。

「タバコ、吸うようになったんだ。」

「最近ストレス溜まっててさ。タバコでも吸いたい気分になったよ。」

「私のせい？」

「いや。ここ数年いろいろあって もうなんか、嫌になっちゃったな。なにもかも。」

「そうなんだ。」

「どうして久保の誘いを断ったの？アイツ、ホントに金なら持つてるのに。」

「金なんか、どうでもいいよ。まだ 信治のこと、好きだし。」

「え！？じゃあなんで僕をつったんだよ！」

「ほら、また『僕』って言った。」

「？」

「信治はね、本気で何か言う時はいつも、自分のことを『俺』って言うんだよ。気付かなかったでしょ。」

「うん。」

「信治は、私という時はいつも『僕』って言ってた。私に、愛してるって言わせた時も、やっぱり『僕』だった。前からなんとなくわ

かってたんだ。信治は私に本気じゃない。ただ独占欲で別れたくないって思っているだけ。ただ私に合わせているだけ。それじゃあこの先、上手くやっていけない。信治の心は、違う誰かを想っている。それに気付いてしまったから、私は 信治と 別れよって、そう決心したんだよ！」

恵子は、最後泣きながら話していた。

信治は唇をギュッと噛んで、必死に、必死に涙をこらえていた。

「今までありがとう。楽しかったよ。」

恵子はそう言っで、一人で歩き出した。

その姿を追いかけれなかったこと。

それが答えなんだと、信治はようやく気が付いたのであった。

夜の浜辺に、信治は一人座っていた。

「あら、珍しいわね。」

懐かしい声だった。

「ここに来れば、会えると思ってたよ。七海さん。」

「会ったときは、まだ子供っぽさがあつたけど　なんか大人っぽくなったね。」

「大人ですもん。」

「年をとれば大人、ってもんではないよ。いろんな経験をして、苦労して、泣いて　そうやって人は大人になっていくんだと、私は思う。」

「　あのかきは、すいませんでした。幽霊なんて信じてなかったし、ホント怖くて、ショックで　」

「今はもう怖くないの?」

「うん。だって、七海さんは七海さんですから。」

「ありがとう。」

「今日は、七海さんに話があつて来ました　俺、七海さんが好きです!初めて会ったときから、もう好きになつてたんです。そして、今でも好きです。」

「　私幽霊だよ?」

「わかってます。でも　それでも言います　付き合つて下さい!」

「　ごめんなさい。私には好きな人がいた。今でもその人のことが忘れられないの。だから、あなたを好きにはなれない　もうここにも来ないで。」

「　　ありがとう。」

信治はそう言っ、その場から立ち去るよに歩き出した。

涙が止まらなかった。

信治はこれからの恋に向き合つため、七海にフられに来たのだ。

七海はその覚悟を知り、わざと冷たく断つたのだ。

二人が生きているときに出逢っていれば、幸せな未来があつたのか
もしれない

だがそれは無い。

どんなに願っても、時は戻ることを知らないから　　。

第八話：夢

金で夢は買えるか。

答えは簡単。

YESだろう。

すべてのものがそうとは言えないが、金が無ければ叶わない夢というのは、少なからずあるハズだ。

信治の妹、春奈は生まれつき体が弱い。その時点で、抱ける夢も限られていた。

それでも春奈は、小学生の先生になりたいと、一生懸命勉強している。

当然大学にいかねばならない。

当然金が必要になる。

今は春奈が世話になっている、おじさんだけが頼りだった。

「おう！春奈久しぶり。」

「お兄ちゃん！」

「ねえ、この家タバコ吸っても大丈夫だね？」

「うん、おじさん吸うから。お兄ちゃん、タバコ吸うようになったんだ？」

「そうだよ。」

「やめといった方がいいよ。体に悪いし。」

「それはわかってるんだけど、なんていうか、大人になると、苦味がうまく感じるようになるんだな。タバコの苦味、人生の苦味、こういったものを求めてしまっただな。うん。」

「なに自分で勝手に納得してんのよ！まっ、いいけど。」

「おじさんまだ仕事？」

「うん。もうそろそろ帰って来ると思うけど。」

「そっか。いや、車のローンもうちょいだから、残りの分全部払っておこうと思って。」

「じゃあ遅くなるようなら、私預かっとくよ。」

「そっか、頼むよ。」

信治はもう、誰にも金を貸したり預けたりはしないと決めていた。だが、妹だけは違った。

自分はもうどうでもいいから、妹だけは、春奈だけは幸せになってほしいと、心から願っていたのである。

「大学受験そろそろだろ？大丈夫か？」

「うん。お兄ちゃんと違って、デキが違うから。」

「うーん、言い返せない。」

「ふふふ。」

「おじさんが全部支払ってくれるの？」

「うん。金のことはまかせとけ！だって。」

「そうか。おじさんにはホント、頭が上がらないな。」

「そうだね。」

「？」

帰りの車の中で信治が思うのは、春奈が少しだけ見せたうつむいた顔だった。

（あいつがあんな顔するなんて 何かあったな。）

信治はまた近いうちに、妹に会いに来ようと考えていた。

「伊藤さん。最近元氣無いですね。」

そんな心配をしているのは、信治の後輩、川村だ。

「シンちゃんも、いろいろあったからねえ。彼女とも別れたみたいだし。」

話が好きで噂も大好きな木下は、信治にあったこと、だいたいは知っていた。

「えっ！？彼女と別れちゃったんですか！？」

「そうみたいよ。ほら、優奈ちゃん。今がチャンスかもよ。シンちゃんのこと、好きでしょ。」

「はい。好きです！」

（素直だねえ。）

「じゃあ、頑張って告白してきます！」

と言って席を立った川村。

「優奈ちゃん！なんにも今すぐじゃなくても 行っちゃった。」

一分後。

「フられましたあ。ううう。」

「よしよし。でもいきなり告ったらダメよ。順序よくいかないと。これから勝負よ！応援するから！」

「ありがとうございます。ううう。」

（こいつ面白いな。）

川村が悲しんでいるのをよそに、木下はとても楽しそうだ。

一方信治はというと 全く興味も何もない。そんな感じに見える。今の信治に、恋愛や友情といった感情は必要無いのだ。

ただ妹のことだけ、それだけが気がかりなのだった。

「信治、今日夜ヒマか？」

「はい、特に予定もなんもないですよ。」

「たまには二人で、飲みに行くか！」

木村係長が、珍しく飲みに誘ってくれた。

信治は断る理由もないので、それに頷いたのだった。

「では、とりあえず 乾杯！」

二人はグラスを合わせビールを飲む。木村は一気に飲み干してしま

い、早くも次のビールを頼んでいた。

「信治、なに食べたい？今日はなんでもおごってやるぞ！」

「えーと　じゃあ、シシヤモと焼き鳥で。」

「よしわかった！あと俺のオススメも頼んどくからな！」

仕事のあとの酒は、なぜこんなにも旨いのだろうか　二人は次々とグラスを空けていった。

「　信治。最近どうだ？」

「どう　っていわれましても。」

「疲れてないか？ストレス、溜まってるんじゃないか？」

「うーん　疲れてますね。風信入ってから、いろいろあったんで。」

「そうか　なにか辛いことがあったら話せよ！ただ聞いてもらうだけでも、けっこう楽になったりするからな。一人で抱え込むんじゃないぞ。まあ、こんな俺で良ければだけど。」

木村は、最近元気がない信治が心配で飲みに誘ったのだ。

信治も、それはわかっていた。嬉しかった。本当に嬉しかった。

でも信治は、何も言わないつもりでいた。言ったところで、何も変わらないからだ。

だが、なぜだろう　酒のせいだろうか。木村になら話したい！そう思えてきたのだ。

「俺の両親は、自殺したんです。金のせいで。」

「借金か？」

「はい。俺と妹を残して ショックでした。」

「それはショックだろうな。」

「そのとき思っただんです。なんで金なんかの為に死ななきゃいけないんだ！って。それで探しました。金より大切なものが有るはずだ！って。」

「それは、見つかったのか？」

「世の中金だ！金があれば何でも手に入る！金が無きゃ何もできない！ 小さい頃、そんなハズはないと思っていました。大人になったら、金があっても無くても、頑張れば必ず幸せになれると思っただんです。でも 実際大人になってわかったんです。金を得る為に働いて、金を増やす為に頑張って、金が無ければ金を借りて 人はそうやって生きているんだって。所詮世の中金なんだって。 。けど、金で買えないものもあるんじゃないか？金より大切なものもあるんじゃないか？友情とか、愛情とか、家族とか、命とか、そう思っただんですけど 結局金の方が強いんです。金の力には、なかなか勝てない そんなことを考えてたら、いつの間にか俺も借金だらけになりました。今ならわかります。両親がなぜ自殺をしたのか。金の無い苦しみ、辛さ これは本当に金が無くなっただけにしかわからない。」

死んだ方が楽なんじゃないか？つて、本気でそう思えてくる。

本当に、苦しいもんなんだつて　。

両親と住んでいた家の近くに、灯台があるんです。断崖絶壁に建っていて、そこからの眺めは最高なんです。もし、そこから飛び降りたら、死ねるかな、とか　そう考えたこともあります。でもまだ、体の弱い妹が心配で。あいつが夢だった先生になって、結婚して、幸せになって　それを見届けるまでは、死ねない！なんて勝手に決めてたりします。」

「そうか　確かに金の無い苦しみは、実際なってみないとわからないかも知ないかな　でもな、信治。男なら、探したものは見つかるまで探せ！途中で投げ出すんじゃないぞ！そして見つかったら俺に教えろよ！俺も気になるからな。それまでは、勝手に死ぬ事は許さん！わかったか！」

木村の言葉は、広く、優しく、それでいてズシツと重みがあった。

「はい　わかりました。」

信治は、うれし泣きしそうな気持ちだった。だが涙は流れなかった。

木村の言った通り、話をして何かが変わったワケではない。借金が減ったり、克也や寺道が帰ってくるワケでもない。

でも少しだけ、信治の心は軽くなった。その『少しだけ』が、どれほど大切なものなのか、その時の信治には、まだわかっていなかったのである。

「今日はお兄ちゃんが来るって言うから、気合い入れて作ったのよ！」

「わお！豪華なメシ！お前、料理の腕上げたんじゃないか？」

「へっへっへー。」

信治は土日の休みを利用して、春奈のいるおじさんの家に、一泊しに来たのだ。

「うん うまい！何の料理がよくわからないけど うまい！」

「良かった。」

「ところで、おじさん遅いね。」

「ああ、今日はなんだか飲み会があるみたいで、帰ってこないよ。」

「そうなんだ。」

「どうかしたの？」

「ううん とりあえずメシ食ってから話そうぜ。」

信治はチャンスだと思った。二人きりなら、きつとなんでも話して

くれる。そんな気がしたからである。

「ごちそうさまでした！」

「片付けちゃうね！」

春奈はそう言っただけで台所へ行った。
信治は考える。

（どう切り出したらいいものか　ってか、何があったんだろ？男関係か？なら別に首を突っ込む必要もないかも　金の問題とか？　そりゃ僕だろ。おじさんいるから大丈夫だと思うけどなあ　まあ、なんもなけりゃ、それが一番いい。）

なんて考えているうちに、どうやら片付けも終わったようだ。

「終わった終わったと。んで、なんの話？」

「うん　なあ春奈。最近何かあったか？」

「ん？え　なんも、ないよ。」

信治にはすぐわかった。ウソをついていると。

「正直に言いな！何があっても怒らないから！なんか悩んでるだろ。俺にはわかるんだからね。」

「誰にも言わない？」

「もちろん！」

「おじさんにもだよ！」

「？もちろん！」

「おじさんには、私もお兄ちゃんも助けられてる。」

「うん。」

「おじさんがいなかったら、私生きていけなかったかもしれない。」

「うん。」

「だからね　逆らえなかった。」

「え？」

「言いなりになるしかなかったの！！」

「どういう事だよ。」

「妊娠した。」

「は！？」

「おじさんの子が、今お腹にいるの!!」

と、泣き出す春奈。

信治は予想していた。あらゆる悪い方向で、どんな事を言われても平然としていられるように、予想していたのだ。

だが、これは予想外だった。予想以上に悪かったのだ。それでもなんとか冷静に、パニックにならないようにと、自分の心に言い聞かせ話した。

「それで、春奈は産みたいの？その子。」

「産みたいわけじゃないじゃん!」

「おじさんは知ってるのか?」

「知らないよ!」

「そうか　　わかった。今すぐここを出よう!俺のアパートに来ればいい。子供は　　かわいそうだけど、おろすか。金はなんとかする!心配するな!」

そう言つて、信治は妹を抱きしめた。

いつからこんな事に?

何年も前からか?きつと妊娠しなければ、このまま大学に行くまで耐えるつもりだったのだろう

なぜ気付かなかった?

なぜもつと早く気付いてやれなかった!?

信治は自分を責めた。

そしてまた、真っ黒な感情が浮かび上がってくるのを感じたのだった。

次の日。

「ただいま！おう信治！元気にしてたか？ あれ？春奈は？」

「妹はもうここにいませんよ。」

「どういう事だ？」

「どういう事！？おじさん。それは自分の胸に聞いたらわかるんじゃないですか？妹がなぜ、あなたの前から出て行ったのか！！」

「そうか。聞いたのか。だがよく考えた方がいい。大学に行く金はどうする？お前には払う余裕などないだろ。私にはある。何も聞かなかった事にして、私に預けとけば全てうまくいくんだぞ。」

「は！？何も聞かなかった事にして！？全てうまくいく！？ふざけんなよ！！妹の、春奈の気持ちはどうなる！あいつが今までどんな気持ちで耐えていたか。どんなに辛かったか。でもあいつはな！少しもイヤな顔しないでいたんだ！兄の俺にすらわからないほど、平然に振る舞っていたんだぞ！！それを昨日ようやく吐き出してくれた。今更あなたの所になんか戻せるかよ！！」

「そうか。じゃあ勝手にすればいい。今までの恩も忘れて、金に苦
労して親のように勝手に死ねばいいさ。」

ブチッ！

信治はキレた！！

気付けば、信治はおじさんをボッコボコに殴り倒していた。

「ハーハーハー。」

「お前 ゲホッ 訴えてやるぞ！」

「勝手にしろ！捕まるのはそっちだ！」

「はははは。わかってないな。私には金とコネがある。それでも
み消すのは簡単なんだよ。」

「あっそう。好きにすればいいさ。俺はもう失うものなんかな
いから。」

信治はそう言っで玄関に向かった。そして帰り際に、

「おじさん、お世話になりました。二度と顔も見たくないけど
でも、俺はおじさんのこと、本当に尊敬してたんです さようなら。」

それだけ言い残して出て行った。

「。。」

二人はその後、二度と会うことはなかった。

結局おじさんは、信治を訴えなかったからである。

さて、どうしたものか

大学資金は とりあえず奨学金で払うとして いや、それじゃ不安だし、子供をおろす金もある。 金が必要だ。大金が 。

信治はある決意を固めた。

とても暗く、とても悲しい決意を 。

第九話：無

見慣れた町が姿を変える、この白い季節。

このまますべて、雪に埋もれて無くなってしまうばいいのに 信治はそう思っていた。

中絶の費用は信治が払った。ローンカードを使って、ギリギリだった。

そしてもう、これ以上借りられない事も、信治は知っている。

「シンちゃん今日は早いね。ご飯まだできてないのよ。」

「あ 今日のご飯いいですよ。あの ばあちゃんの定期の更新に来たんです。」

「あら、今までそんなのなかったけどねえ。」

「うん またに更新しないといけないんです。証書と印鑑ありますか？あつ、印鑑はコレです。」

信治はあらかじめ調べてきた印鑑のコピーの紙を出すと、佐藤は証書と印鑑をタンスから持ってきてくれた。佐藤がコツコツ貯めたという、一千万の証書だ。

「じゃあ証書の裏に名前を　あとこの用紙にも名前をお願いします。」

信治はそう言っ一枚のある紙を取り出した。それは、解約伝票だった。

「えー　これでいいかい？歳をとるとよく見えなくて、ダメねえ。」

佐藤は信治の言っ通り、証書と用紙二枚に名前を書いた。

「じゃあ印鑑借りますよ。」

信治はその書いてもらっ名前横、二カ所に印鑑を押した。

「では、証書預かりますよ。今日はもう行きます。」

「あら、もう帰るのかい？」

「うん。」

「次来るのは　来週だね。」

「うん。」

「じゃあ来週は、シンちゃんの好きなカレー作って待ってるからね。」

佐藤はそう言っ、ニツコリ笑っていた。

信治はまともに見ることができなかった。そのあまりにも優しすぎ

る顔を。

（ばあちゃん　ごめん　。）

信治は先に支店に戻り、佐藤から預かった証書の解約手続きを頼んだ。

「これ、現金でお願いします。」

「現金で？」

「はい、なんか　使う用があるそうで。頼みますよ。」

普通大口の解約は、通帳に入れたりするものだ。だから

「現金で」と言った信治を木下は、ちょっとだけ不振に思ったのだ。

一千万を手にした信治は、こっそり隣のアパートへ。

「春奈、昨日話した通りだ。この金を持って、一人で暮らすんだぞ。」

「

「わぁお！よくこんな大金借りれたね。しかも現金で！」

「そんなのどうでもいいから、さあ、出ていきな！」

「んー やっぱり、せめて明日にする！」

「ダメだ！今すぐ出て行かないと、僕が大家さんに追い出されるんだぞ！ほら、早く！」

「わかった 大学休みの日に、遊びにくるからね。」

春奈は信治のアパートを出て行った。

大学に合格した春奈。

信治は金だけ渡して春奈を遠ざけたのだ。

それはもう、信治が取り返しのない罪を犯したからである。

（一千万あれば、なんとかなるよな さよなら、春奈。）

信治は再び、集金先を歩いた。

そして今日でそれも終わる。信治には、全てを捨てる覚悟はできていた。

（次は 鈴木のおじいさんとか。ここも、いろいろ教えてくれて

世話になつたなあ。)

「毎度様です!」

「やあ、君か。まあ上がりなさい。」

信治はさつそく仕事を済ませると、こつ尋ねた。

「鈴木さん 今日もなんか教えて下さいよ。世界のことわざ。」

「君から訊いてくるとは珍しいな そうだな。ではコレだ。」

鈴木は、いつもならすぐに言ってくれるのに、今日はなんだか悩んでいた。まるで、何を言つてあげればいいのか選んでいたようだった。

「金^{きん}は錆びない。このことわざの意味がわかるか?」

「いいえ。」

「真の善人は、決して悪人にはならないということだ 私は、君もそうだと思うよ。」

ドキツとした。

本当に全て知っているかのようにだった。
一気に涙がこみ上げてきた。

信治は急いで帰る準備をし、玄関に向かい、靴を履いた。

「もう、次の家に行かないと 鈴木さん。僕は金^{きん}なんかじゃない

です。金^{きん}なんかじゃ ないですよ お世話になりました！」

信治はそう言つて、鈴木の家を飛び出した。
途端、抑えていた涙が溢れた。
理由はわからないが、涙が止まらなかった。

(こつで、最後だな。)

「毎度様でーす！」

それは保険屋さんの、石田の家だ。

「はい。」

バタバタと奥から駆けてくる。いつもながら、元気な奥様だ。

「ねえねえ、伊藤さん生命保険に入らない？」

「いや、もう、いいですよ。」

「もうつて さては別の保険屋で入ったわね！もう、最近の若い子はこれだもんな。いつも定期とか組んであげてんのに。」

「いや、そういうわけでは」

「どうせ掛け金が安いとか、死亡保険が高いとか言われて作っちゃったんでしょ。あーあ、うちはもつといい保険あるのに。」

「だから、別にそういうことでは」

「でもね！いくら死亡保険が高いからと言っても、死んだらダメよ！金の為に死ぬなんてのは、絶対ダメだからね！それだけは覚えておくように。」

「はあ。」

（なんか知らないけど説教されてきた感じた。まあ タイミング的には合ってるんだけど。でも石田さん。金で命は買えます。そうだと保険入つとけばよかった。そしたら春奈にもつと楽しせられたのに。）

道を歩きながらそんなことを考えていた、そのときだった！

信治の目の前に一匹の犬が。その犬は、全身茶色で、右前足だけが黒かった。

（ あいつ 生きていたのか！ 良かった 本当に ）

信治が通り過ぎようとしたとき。

「ワン！ワン！」

犬は信治にすり寄ってきたのだ。

「おまえ　覚えててくれたのか？」

「ワン！ワン！」

犬はうれしそうにシッポを振り、足に頭をこすりつけてくる。

信治はその頭を撫でてやり、ギュッと抱きしめた。

「ポチ！」

その声に犬は反応し、そっちの方へ走り出した。そこには一人の男の子が。

「そうか　ポチか　へっ。簡単な名前つけられたなあ。もう穴に落ちるなよ　ポチ。」

金が無くても救われる命はあった。

もう少し　もう少し早くそれがわかっていたら、信治がこの先しようつしていることを、変えられたかもしれないのに。

いつも通り支店に戻ると、いつも通り仕事を片付け、そしていつもより早く帰り支度を始めた。

「ん？信治、もう帰るのか？」

「はい。」

「いいぞ！たまには早く帰って休め！遊べ！」

木村はそう言っただけいつものように微笑む。
この笑みに、何度助けられたことか。

「木村係長　お世話になりました。」

信治は職場を後にした。

木村は何か引つかかる感じがしていた。あまりにもキレイに片付いた信治の机。次誰が使っただけになっても、いい状態になっている。

信治の最後の言葉。『お世話になりました』この言葉を、木村はどこかで聞いたことがあった。

どこだ？

そうか。

野田が死んだとき、信治が言っていた。

野田が死んだとき　死んだとき？

嫌な予感がした。

「係長！電話です。」

「あつ、ああ、誰からだ？」

「佐藤ですって、女性の方ですよ。」

木村はすぐその電話を取った。

「もしもし、お電話変わりました はい え？信治が はい
はい、わかりました。こっちで確認してみます。はい いえ
いえ、とんでもない ではそういうことで。はい、どうも。」

その電話で、木村の嫌な予感はず信に変わった！

「次長！すいません。私今日はもう帰りますので。」

いつもなら最後の最後まで残って仕事をしている木村。

「そうか 気をつけて帰れよ。」

次長の永井も不思議に感じたようだったが、別に悪いことでもないし、毎日遅くまで残っている木村を引き止める理由もなかった。

木村が風信を出ると、まず隣のアパートを確認した。
信治のいる部屋は電気が消えており、真っ暗だった。

「おい！信治！いるか？」

ドアを叩いたが、やはり応答がない。

次に木村は携帯電話を手にした。もちろん信治にかける為である。
ブルルルル ブルルルル ブルルルル

やっぱ出ないのか

そう諦めかけていたとき。

「はい。」

信治が電話に出たのだ。

「信治！今どこにいる？」

「どこだって、いいじゃないですか。」

「さっきな、佐藤さんから電話があつたんだ。」

「そうですか　じゃあ全部バレちゃいましたね。もう俺は罪人なんです。信用金庫なんかで、働いてちゃいけないんです。でも、それももうどうでもいい　疲れました。両親に会いに行こうと思います。最後まで、迷惑かけてすいません。」

そこで電話が切れた。

「信治！おい！　くそっ！」

木村は焦った。だか、こんなときこそ落ち着かねば
木村は必死に考えた。信治が今どこにいるのかを。

そつえば電話にやたら風の音が入っていたな

風が強い場所

信治この間　なんて言ってたっけ？

灯台 ？

そつだ！両親と住んだ家の近くの灯台！そこに違いない！

木村は急いで車に乗ると、スピードを上げて走った！

信治が昔住んでいた家は知っていた。

寺道が、信治とドライブで行ったときのことを、よく話していたからだ。

そこの近くの灯台と言えば、一つしかなかった。

間に合えよ ！

冬の海は見ているだけでも凍えそうになる。

灯台がある崖の上も風が強く、それだけで凍りそうだ。

そこに信治はいた。

体はともかく、心は本当に凍ってしまったかのような、そんな冷たい顔で、ただただ真つ暗な海を見ていた。

「父さん 母さん 今そっちに行くね。」

信治が崖の端まで歩み寄った、そのとき！

「信治！！」

後ろで大きな声がした。木村だ。

「係長 なんでここに？」

「なんではこっちのセリフだ！なにやってるんだ！戻って来い！」

「なにつて 見た通りですよ。もうそっちへ戻る気もありません。俺は、もう生きる資格が無いんです。」

「どうした？何があった？どうして死ななきゃならない！？」

「ばあちゃんから 佐藤さんから聞いたでしょ。俺は、ばあちゃんの一千万の定期を、勝手に解約して、盗んだ！」

「なぜそんなことを。」

「妹の夢は、小学校の先生になること。でも妹は、生まれつき体が弱い。それでも妹は、毎日毎日勉強して、教師になろうと頑張ってた。あとは大学に入れば、その先は大丈夫だと思ってた。大学の資金は、おじさんが出してくれるハズだった。でもおじさんは裏切った！これから妹が一人で暮らしていくのに、金が必要だった！大学資金も必要だった！でも俺にはそれを助ける余裕なんて無い！どうしても妹の夢は叶えてやりたかった！どうしてもお金が必要だった！だから俺が犠牲になればそれで妹が幸せになるならそう思った。俺はもうどうでもいい。人生なんて、メンドクサイことばっかで、もうイヤになってたから。だから。」

「バカやろう！誰かの犠牲の上で、人が幸せになんてなれるか！おまえの妹が、そんなので喜ぶとも思ってるのか！信治 人生なんてな、メンドクサイものなんだ。それが人生ってヤツなんだ。でもな、人が生きるのに、資格なんていらなんだぞ！誰にもそんなもの必要ないんだ。生きていくことに意味があるんだ。死んだらダメだ。まだやり直せる。生きてればいくらでもやり直せる。そうだろう？」

「もう、遅い もう遅いよ！！係長 答えが見つかったら教えてほしいって言ってきましたよね。答え、出ましたよ。金より大切なものは
無い。」

信治は両手を広げ、暗い海へと飛んだ。

木村は走ったが、間に合わなかった。

信治の姿は、真っ暗な闇へと落ちていく。

命の炎は大きな渦にのまれ、その輝きを消していったのであった。

第十話：終わり

「父さん！母さん！待ってよ！」

信治の行く道の先を、信治の父と母が歩いている。

信治は必死について行こうとするのだが、なぜか二人は待ってはくれない。

それどころか、置いていこうとするのだ。

「ねえ！待ってってば！」

信治は走った。が、一向に追いつけそうにない。

急に、誰かが信治の手をとった。

その手は、細く白く美しく、そして暖かい手だった。その手に導かれるまま、信治は両親とは別の道を進んだのである。

「目が覚めたか。」

「係長。僕は。」

「助かったんだよ！良かったな！心配したんだぞ！」

信治は病院のベッドの上にいた。

木村はその横のイスに座っている。

信治はようやく状況を理解できた。

「そうか 助かったのか。せつかく覚悟を決めて、飛び降りたっていうのに。」

「信治！おまえまだそんなことを言ってるのか！おまえを助ける為にどれだけの人が頑張ったと思ってる。おまえをどれだけの人が心配していると思ってるんだ。少しは感謝しろ！ちつとは喜べ！」

「だって 嬉しくても、悲しくても、もう涙が出ないんです。僕の涙は枯れてしまった。きつと、心が死んでしまったんです。」

「いいか信治。涙が枯れるなんてことは無い！生きているなら、涙は絶対枯れない！おまえの涙も、まだ枯れちゃいないよ。」

「また生きなきゃならないのか メンドクサイな。」

「まあ！メンドクサイとかいうし。メンドーなのはしょうがないでもな そうだな、例えるなら 車を運転していて、右折か左折しなきゃいけないでしょう。本当は右折したいんだけど、車がやたら

来るからなかなかできない。メンドーだから左折してしまえ！となることもある。だけど、どうしても右折しなきゃならないときもある。どんなにメンドーでもだ。今のおまえは、右折しなきゃならないときだと思うんだ。」

「。」

「俺はちよつと用があるから、一旦帰るな。冷蔵庫に、適当に飲み物とイチゴが入ってるから、食べるといいよ。」

「ありがとうございます。」

「あと、命も体も問題ないけど、安静にしとかなないとけないらしいから、ゆっくり休め。体も、心もな。」

木村はそう言っ出ていった。

信治はベッドから起き上がり、立とうとした、が。

「うわっ、ダメだ めまいがする。」

すぐにベッドに座ってしまった。

木村が買ってきた、イチゴパックを完食した信治。

「ヒマだ。」

特にする事もなく、ボー　っとしていた。

コンコン！

ドアをたたく音がして、ガチャッとドアが開いた。

「おう、伊藤君。大丈夫か？」

柳田支店長だった。

「あつ、支店長　すいません。迷惑をかけて。」

「別に迷惑ではないさ。ほら、イチゴ買ってきたからな。」

「イチゴっすか。」

「早く回復して復帰してくれないと、支店は人数が少ないんだから。頼むよ！」

柳田は信治の肩を、ポンと叩いて帰っていった。

「復帰なんて、できるわけないじゃん。」

あまりにも普通の態度に、信治は戸惑っていた。

しばらくして、コンコン！またノックがした。

今度は、永井次長と、草野だった。

「伊藤君大丈夫!？」

「なんだか、大変な目にあつたようだな。」

「ええ まあ。」

「まったく、夜中に海で何やってたんだか。」

「女とでも、会つてたんじゃないの?」

「いや 違いますよ。」

「のど乾いたな。信治、適当にもらつよ。」

「ああ、どうぞどうぞ。」

「また!次長甘いの選んで!」

「だって好きなんだもん。」

「病氣になっちゃいますよ!」

この二人は、ホントに親子のようだ。

聞けばたまたま病院で会つたらしい どこまで気が合つんだか。さらには、お見舞いに持ってきたものまで一緒だった。

「はいイチゴ。」

「なに、草野もか！ほら、イチゴ。」

「イチゴ。」

なんだか賑やかな二人。やがて帰っていった。

「でもやっぱおかしいな。自殺しようとした事まで、誰も知らないみたいだ。係長が帰ってきたら訊いてみよ。」

自殺はともかく、定期を盗んだのはみんな知っているハズ。そう思っていたが、なにか違うようであった。

次に来たのは立花代理。

「久しぶりだな、伊藤！元気だったか！？いや元気じゃないからここににいるのか。」

「代理は相変わらず元気そうですね。」

「あつたりまえだ！俺はウジウジしてるのが嫌いなんだ。いつでも元気さ！今日はたまたま近く通ったから、ちよつと寄ってみた。ほら、田中商店の美味しいイチゴ買ってきてやったぞ！」

田中商店と病院は、距離的にけっこう離れている。

（また意味わかんないようなこと言ってる。）

信治はそう思ったが、素直にうれしい気持ちはあった。

「じゃあ帰るからな！なんか困ったことがあったら電話しろよ！」

と、立花も帰っていった。

その次に来たのは、ショッピングモールで働いている加藤だ。

「イチゴ買ってきたよお！」

（またイチゴ。）

「あれ？嫌いだった？」

「いいえ！そういうワケでは　でも加藤さんが見舞いに来てくれるなんて　ありがとうございます。」

「いいのよ！伊藤さんが海に落ちて大変だ！って聞いたもんで。いつかのお礼も兼ねてね。」

「お礼？」

「ほら、アドバイスくれたじゃない。空を見る！って。」

「ああ、はいはい。」

「あれね、意外と効果あるのよ。こんな時こそ空を見ればいいわ。」

「でも この窓から上見ても、建物しか見えないんすよね。」

「あら じゃあ代わりの、プラス思考になれる方法を教えてあげるわ！まずね、人は弱気になっちゃいけないのよ。無理やりでも前向きに考えないと。そのためには、ちくしょう！負けるか！ふざけんな！って気持ちえ、常に持つておくこと。これが私のめげない方法よ。」

「はあ。」

「なんか暗い顔してるから。どうせ彼女にでもフられたんだろうけど、そんなの、伊藤さんらしくないわよ。じゃね。」

加藤はササツと帰ってしまった。

「負けるか ってか。」

だが加藤が残した言葉は、信治の胸の中に確かに何かを残していたのだった。

コンコン！

「はい。」

扉を開けて入ってきたのは、ガソリンスタンドの事務の川岸だった。

（げっ！なんで川岸さんが　？？？）

「伊藤さん！何やってるの！もう、伊藤さんが来れなくなったら誰が両替とかしてくれるのよ！」

「す、すいません。」

「まったく　こうやって文句言える相手がいないと、つまらないのよね。早く良くなって仕事なに戻るのよ。」

川岸はそれだけ言って帰っていった。

お見舞い品も、ちゃんと置いていつてくれたのだった。

（げっ　やっぱりイチゴだ　でも、川岸さんって　意外といい人かも　。）

コンコン！

「はいはい！」

「シンちゃん生きてるか！？」

「あっ、あの　大丈夫ですか？」

それは木下と川村のコンビだった。

（また賑やかそうなのが来たなあ　。）

「伊藤さんに、イチゴ、買ってきたんです。良かったら食べて下さい。」

「イ、チ、ゴ!？」

信治の意外な反応に川村はビックリ!!

「ああああゴメンナサイ!イチゴ嫌いでしたか？」

「いや、いやいやいや、ゴメンゴメン。今ちよつとイチゴ恐怖症でさ ありがとう。あとで頂くよ。」

「良かったです。」

今度は満面の笑みの川村。

「ホント優奈ちゃんはわかりやすいなあ ほら、訊いとけ訊いとけ。」

木下が、なにやら余計なアドバイスをしている。

「あつ、あの。」

「なつ、なんでしょう。」

「伊藤さんの体調が心配なんで、メールアドレスとか教えてもらってもいいでしょうか。」

「うーん、いいんだけどさ。ほら、僕海に落ちたもんで、ケイタイ壊れちゃったんだよね。」

ガン！！

川村はガツクリ肩を落とした。

「よし、じゃあ今度ケイタイ買ったら、真っ先に川村さんに番号教えるから！」

「ホントですか！？ありがとうございます！」

満面の笑みの川村。

（ホント、わかりやすい人だわ。 ）

それは、さすがの木下も呆れる程だった。

やがて二人も帰っていった。

夕方。いつの間にか、冷蔵庫の中はイチゴでいっぱい！冷蔵庫の上までイチゴだらけになっていた。

「にしても、もうちょっとバリエーション増やせよな！全部イチゴってどーゆーこと！？」

信治もついついツッコんでしまった。

コンコン！

「入るぞ。」

そう言つて木村が帰つてきた。

「どうした？変な顔して。」

「だつて、見てくださいよ。イチゴ、イチゴ、イチゴ。みんなイチゴしか持つてこないんですよ？」

「ハハハ、でも良かったな。」

「何がですか？」

「信治、表情が明るくなったよ。」

「あつ。」

信治も自分で気付かないうちに、暗い気持ちが消えていることに気付いた。

「ここにあるイチゴの数だけ、信治を心配して来てくれた人がいたつてことだ。きっと、誰も金なんか関係なしに来たんだろうな。」

「。」

「信治。ホントは自分でも気付いているんじゃないか？金より大切なものなんて、世の中いっぱいあるんだって！」

「。」

「用があるって言って出て行ったが、実はある人を迎えに行っていたんだ。」

「誰ですか？」

「どうしても信治に会いたって その人にだけは、信治がしたことで、本当のことを全部話してあるからな。佐藤さん、どうぞ！」

ドクン！

急に鼓動が高まった。

その瞬間、信治は全てがスローモーションに見えた。ゆっくりドアが開き、その人の姿が見えた。

そこには、信治が本当のおばあちゃんのように慕っていた、佐藤がいた。

佐藤はいつものような笑顔ではなかった。

だが、定期を盗まれ怒っている顔でもなかった。

「シンちゃん！」

佐藤はヨレヨレの足でかけよってきた。

そして信治を、ギュッと、強く抱きしめたのだった。

「ばあ ちゃん ゴメン ! ゴメンナサイ ! うつつ 本当にゴメンナサイ ! うつつ ああああ ! ばあちゃん ! わあああああああああああ ! ! !」

信治は泣いた。

全身をふるわせて泣いた。

いままで貯めていた分を一気に解放したかのように、いつまでも泣き続けた。

「 ほらな信治。 涙は枯れていなかっただろ ? 心は死んでいなかっただろ ? なら生きなきゃな ! どんなにメンドーでも、いくら辛くても、生きなきゃな ! 信治 ! 」

「は うつつ はい 。」

その後、信治は風信を辞めた。

周りは許してくれたが、信治の中では許されないことだった。

今信治は、割と給料が高いバイトを見つけ、働いている。

風信は辞めたが、川村は信治と連絡を取り合っている。

時期、付き合うことになりそうだ。

佐藤は、一千万の金は信治にあげたのと言い張った。いくら信治が返すと言っても聞かない。いつしか信治も、しぶしぶ承諾するようになった。

代わりと言ってはなんだが、信治は今、佐藤と一緒に暮らしている。

夜の浜辺で仰向けになり、信治は空を見ていた。
星がキレイな夜だ。

「七海さん あのと僕の手をひいて助けてくれたのは、あなたですよね。初めて七海さんに触れました。暖かい手だった。ありがとう。金より大切なもの、見つかりましたよ。言葉じゃうまく言えないけど それは確かにあった。僕は借金だらけで、これから金に苦しむと思う。でも、負けない。金なんか、絶対負けないからな!!」

そこに、七海の姿は無い。

でも代わりに、空には他のどの星よりも輝く、一番星がいた。

それは、静かに、優しく、信治を見つめているような気がした。

『金より大切なもの』それは結局なんなのか。答えは人それぞれ違うだろう。

数ある答えの中に、『愛』もあると私は思う。

そうではない！
金が一番だ！

と言う人もいるかもしれない
では、例え話をしよう

もし、あなたの子供が産まれたとして

あなたにソックリな、メチャクチャかわいい子供が産まれたとして

あなたがその子の人生の道を、次の二つから選ぶとしたら

(1) お金にはかなり恵まれるが、人に愛されない人生

(2) お金にとっても苦勞するが、
たくさんの人に愛される人生

あなたはどちらを選びますか？

第十話：終わり（後書き）

あなたにとっての『金より大切なもの』は何ですか？
ご意見をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8102f/>

金より大切なもの

2010年10月10日14時38分発行